

上野城下町遺跡（第5次）発掘調査報告

～伊賀市農人町所在～

2014（平成26）年3月

三重県埋蔵文化財センター



調査区全景（南から）



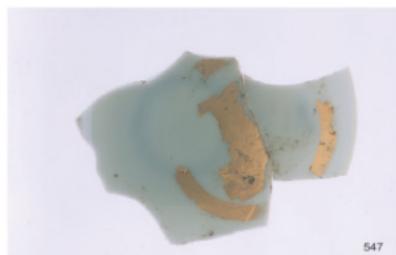
上絵付けされた椀



「いか」の刻印のある土瓶



「いか」の刻印のある急須



金箔のある小杯

例　言

- 1 本書は、三重県伊賀市上野農人町に所在する上野城下町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査・整理の経費は平成24・25年度県土整備部から執行委任によって全額負担されている。
- 3 発掘調査は土工委託を実施し、業務の円滑化を図った。整理および報告書作成は三重県埋蔵文化財センターが行った。本調査の体制は次の通りである。

平成24年度

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

　　調査研究1課 主査 萩原義彦

　　主査 谷口文隆

土工受託機関 株式会社 文化財サービス

調査期間 平成24年5月23日～平成24年7月19日

調査面積 358m²

平成25年度

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

　　調査研究1課 主査 萩原義彦

　　主査 谷口文隆

調査期間 平成25年5月21日～平成25年5月22日

調査面積 28m²

整理担当 調査研究1課 主査 萩原義彦

- 4 調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県県土整備部、伊賀建設事務所、伊賀市教育委員会からの協力を得た。

- 5 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご助言を賜った。

　　畠中英二（滋賀県教育委員会）・藤澤良祐（愛知学院大学）・堀内秀樹（東京大学）・成田涼子（農鳥区教育委員会）・水本和美（東京藝術大学）・小林秀（文化振興課県史編さん班）・福井健二・寺岡光三・市田進一
敬称略

- 6 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究1課が行った。本書の執筆・編集は萩原が行った。

- 7 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

[地図類]

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図（世界測地系に準拠）及び伊賀市都市計画図（日本測地系に準拠）である。
- 2 掃団の方位は、世界測地系・測地成果2000による座標北を表している。なお地域の磁北は真北に対して6°40'西偏している。

[遺構一覧表類]

- 1 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』（1997年版）を用いた。
- 2 本書で使用した遺構表示記号は下記のとおりである。

S Z : 谷地形 S D : 澄 S K : 土坑 P i t 及びP : 柱穴・小穴
3 柱穴の「掘形」とは、柱を据えるために掘削した穴のラインを指す。
- 4 一覧表中の遺構番号は、発掘調査における遺構の種類・内容を問わず通し番号である。本文中において掲載した実測図は、報告番号に基づいて作成している。
- 5 時期については、各遺構の出土遺物等によって判断した。
- 6 規模については、表において長径（長さ）・短径（幅）・深さを各メートル単位で記載し、一部が調査区外に及ぶ遺構の平面規模や、深さが不明については「-」を記入した。
- 7 出土遺物については、遺構から出土しているものを記述した。
- 8 備考については、本文中において記述していない特徴等について記述した。

[遺物観察表類]

- 1 報告書番号は、各遺物実測図の番号に対応する。これは器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号をふっていない。したがってこの番号が遺物の全てではない。
- 2 実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの3桁は用紙の番号で、後側の2桁は用紙内の実測した順序の番号である。
- 3 出土遺構は遺構番号で示している。遺構番号は、遺構平面図及び遺構一覧表を参考にされたい。
- 4 器種については、判明しているものについて記載した。なお椀については「碗」「塊」等があるが「椀」に統一している。
- 5 計測値について記載した口径・器高・その他は、それぞれ最大値をとっている。また、「-」は、計測できないものを表している。単位は、cmである。さらに遺物によっては、長・幅・厚・高台径・底径などを表すこともある。
- 6 調整・技法の特徴は、成されている調整について記述しており調整順序によるものではない。
- 7 素地については、粗密を記し、括弧内に小石・砂粒の有無や大小について記述する。
- 8 色調については、『新版 標準土色帖』（小山・竹原編 19版 1997年）に基づいて表記した。
- 9 残存については、その部位を12分割した際の残存度を示した。
- 10 備考は、その遺物における特徴的な事柄を記載している。

[写真図版]

- 1 写真図版は、遺構・遺物ごとでまとめた。
- 2 出土遺物実測図と写真図版の遺物番号は対応している。
- 3 遺物の写真図版は、縮尺不同である。

本文目次

I	前言	1
1	調査契機	1
2	調査方法	1
3	調査経過	1
4	文化財保護法にかかる諸通知	2
II	位置と歴史的環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	3
III	遺構	6
1	検出層位	6
2	検出遺構	6
IV	遺物	14
1	古墳時代	14
2	江戸時代	14
V	まとめ	53
1	古墳時代について	53
2	江戸時代について	53

挿図目次

第1図	遺跡位置図	第19図	出土遺物実測図 (12)
第2図	遺跡周辺地形図	第20図	出土遺物実測図 (13)
第3図	調査区位置図	第21図	出土遺物実測図 (14)
第4図	古墳時代平面図・B地区土層図	第22図	出土遺物実測図 (15)
第5図	江戸時代平面図・A地区土層図	第23図	出土遺物実測図 (16)
第6図	S D 9 実測図	第24図	出土遺物実測図 (17)
第7図	S K 11 実測図	第25図	出土遺物実測図 (18)
第8図	出土遺物実測図 (1)	第26図	出土遺物実測図 (19)
第9図	出土遺物実測図 (2)	第27図	出土遺物実測図 (20)
第10図	出土遺物実測図 (3)	第28図	出土遺物実測図 (21)
第11図	出土遺物実測図 (4)	第29図	出土遺物実測図 (22)
第12図	出土遺物実測図 (5)	第30図	出土遺物実測図 (23)
第13図	出土遺物実測図 (6)	第31図	出土遺物実測図 (24)
第14図	出土遺物実測図 (7)	第32図	出土遺物実測図 (25)
第15図	出土遺物実測図 (8)	第33図	出土遺物実測図 (26)
第16図	出土遺物実測図 (9)	第34図	出土遺物実測図 (27)
第17図	出土遺物実測図 (10)	第35図	出土遺物実測図 (28)
第18図	出土遺物実測図 (11)		

表 目 次

第1表	遺構一覧表	第7表	出土遺物観察表 (6)
第2表	出土遺物観察表 (1)	第8表	出土遺物観察表 (7)
第3表	出土遺物観察表 (2)	第9表	出土遺物観察表 (8)
第4表	出土遺物観察表 (3)	第10表	出土遺物観察表 (9)
第5表	出土遺物観察表 (4)	第11表	出土遺物観察表 (10)
第6表	出土遺物観察表 (5)	第12表	出土遺物観察表 (11)

写真図版目次

巻頭カラー図版1 調査区全景（南から）

出土遺物（409・497・516・547）

図版1 調査前風景（南から）

調査前風景（南西から）

図版2 調査区全景（北から）

調査区全景（南から）

図版3 1号墳全景（北東から）

2・3号墳全景（南東から）

図版4 SK 11 遺物出土状況（東から）

B地区調査区全景（南西から）

図版5 工事立会調査区全景（北から）

工事立会調査区全景（南から）

図版6 出土遺物（4・6～10・12・13・16・18・19・23・24・26・29・32・34・35・48）

図版7 出土遺物（63・81・100・104・108・109・110・112・116・118・119・121・189・202～208・214）

図版8 出土遺物（220・221・224・227・234・247・248・255）

図版9 出土遺物（256・271・273・275・278・280・304・309）

図版10 出土遺物（312・313・314・320・321・323・327・374）

図版11 出土遺物（377・379・397・409・412・418・436・446）

図版12 出土遺物（358・359・450・465～468・473・475）

図版13 出土遺物（476・479・483・486・489～491・494・497）

図版14 出土遺物（505・511・513・516・517・523・525・530・531・533）

図版15 出土遺物（536～538・555・557・558・560・562・563）

図版16 出土遺物（567・568・578・580・582・588・589・583）

図版17 出土遺物（590・591・599・600・601・604・608・620）

図版18 出土遺物（633・645・650・651・666・668・669・675・676・678・677・679・682）

図版19 出土遺物（683・684・688・689・714・716・718・721・724・749・750・756・766・767・771～773）

図版20 出土遺物（775・778・806・846・852・853・867・895・924）

I 前 言

1 調査経緯

発掘調査対象地は、三重県伊賀市上野農人町の国道25号及び国道163号の交差点である。この交差点は、非常に車輛及び通行人の往来の激しい箇所である一方非常に狭隘である。そのため、国道25号の拡幅の計画が浮上し、道路改築事業が実施されることとなった。

しかしながら、対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られる上野城下町遺跡内である。そのため三重県埋蔵文化財センターは、平成24年度において範囲確認調査を実施した。範囲確認調査は、4ヵ所の調査坑を設定した。調査坑は、№1～4まで付した。調査坑№1から磁器碗が出土し、№2では溝が、№3・4は土坑が確認できた。そのため、国道25号の拡幅工事は、削平を伴うため同年度において発掘調査が実施されることになった。また、今回の対象地の一部は、狭小な面積であるため、工事立会による調査とすることとなった。

2 調査方法

発掘調査対象地は、国道25号を挟んで2ヵ所に分かれている。調査面積の大きい方をA地区、小さい方をB地区とした。調査面積はA地区が310.25m²、B地区が47.75m²、工事立会が28m²である。総面積は、386m²である。調査は排土の都合上、A地区から開始した。表土掘削はA地区北側から重機によって実施した。地区設定は、北西隅から行い北から南にかけての方向に数字を付し（1・2・3・～）、西から東にかけて方向にアルファベットを付した（A・B・C・～）。各地区杭は、世界測地系座標に則って設定した。調査区内に設定された北西隅の杭は、E 2 からである。なお、遺物の取り上げについては北西隅の杭の地区名に拠った。また、遺構番号については、調査区A・B地区、遺構の種類、内容如何にかかわらず、1から通し番号を付した。実測については、全体の平面・断面図（1／20）、個別実測図（1／10）をそれぞれ各縮尺で行った。写真撮影については、全体・個別遺構写真を4×5インチ、35mmのフィルムによ

り行った。

3 調査経過

～調査日誌から～

5月23日（水）

文化財サービスとの現地協議。埋蔵文化財センター（萩原・谷口）・文化財サービス（喜多・広瀬）

5月28日・30・31（月・水・木） A地区、表土掘削。地区設定。

6月1日（金） A地区遺構カード作成。

6月4日（月） B地区、表土掘削終了。

6月5日（火） A地区、遺構検出。B地区、地区設定。

6月6日（水） 南から近世遺構の掘削。

6月7日（木） 古墳の周溝を確認。1号墳の周溝掘削。

6月8日（金） SK II 遺物多し。出土状況の写真撮影。

6月11日（月） 古墳の周溝（2号墳）掘削。

6月12日（火） 午後から雨のため作業中止。

6月13日（水） 調査区の北側の近世遺構の掘削。

6月14日（木） 調査区北端の谷状遺構の掘削。

6月15日（金） A地区遺構掘削終了。B地区に取りかかる。

6月18日（月） B地区的古墳の周溝掘削（1号墳）。掘削終了。台風4号が接近のため対策を講じておく。

6月19日（火） 台風のため作業中止。

6月20日（水） 台風のためフェンス崩れる。

6月21・22・25日（木・金・月） 排水作業。

6月26日（火） A・B地区遺構清掃後写真撮影。

6月27日（水） A・B両地区の個別図作成。

6月28・29日（木・金） 両地区的平面図作成。

7月2日（月） 引き続き平面図作成。

7月3・4日（火・水） 平面図にレベル入れ。

7月5・6日（木・金） 土層図作成。雨のため作業中止。

7月7日（土） 現地説明会のため、清掃。

7月8日（日） 現地説明会の開催。午前10：30から開催し、163名の参加者があった。

7月9日（月） 畦部分の古墳の周溝の掘削。
7月10日（火） 機材一式撤収。
7月17日（火） 伊賀建設事務所に現地引き渡し。
平成25年度
工事立会調査
5月21日（火） 表土掘削及び遺構掘削。
5月22日（水） 遺構写真撮影及び実測。

4 文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、
以下の通り行っている。

- ・三重県文化財保護条例第48条第1項に基づく周知の埋蔵文化包藏地における土木工事等の発掘通知
平成23年11月18日付け賀建第5093号（県教育長宛）
平成23年11月21日付け教委第12-4095号（県教育長通知）
- ・法第99条に基づく発掘調査
平成24年5月29日付け教埋第60号（県教育長宛）
- ・法第100条第2項に基づく出土品の発見認定
平成24年7月24日付け教埋第149号（県教育長宛）
- ・遺失物法に基づく出土品の提出
平成24年7月30日付け教委第12-4407号（伊賀警察署長宛）
平成25年5月28日付け教埋第95号（県教育長宛）
・遺失物法に基づく出土品の提出
平成25年6月3日付け教委第12-4404号（伊賀警察署長宛）

II 位置と歴史的環境

1 地理的環境

伊賀市上野城下町遺跡（1）は、近世に入って伊賀上野城跡（2）が築城され、その城下町遺跡として知られる。伊賀上野城跡及び城下町遺跡の所在する伊賀市は、三重県の北西地域を占める市である。行政区分上伊賀市は、北側を滋賀県、西側を奈良県、南側を名張市、東側を津市及び亀山市に隣接している。伊賀市のほぼ中央部は、盆地になっており、上野盆地の名称で知られている。盆地には、柘植川、服部川、木津川、名張川の河川が流れている。

また、伊賀地域は畿内地域から伊勢湾、ひいては東国に至る通過点として重要視されてきた。とりわけ畿内から伊勢地域に通じる交通路として、山城・大和から上野盆地、加太峠を越える大和街道、長野峠を越える伊賀街道、青山峠を越える初瀬街道がある。これらは、この地域が交通の要衝としての役割を担ってきた証左であろう。その上で上野城跡及び城下町遺跡は、上野盆地のほぼ中央に位置している。その中央部は、東方向から延びる台地先端部にあたり、北側には柘植川及び服部川、南側には久米川、西側には木津川が流れる。立地としては、三方を河川によって囲まれた天陥の地に築かれた城郭といえる。城下町は、その城の南側の台地上を中心発展している。台地上の標高は、151mで台地下の標高146mに対して比高差が5mあり、急峻な地形である。

2 歴史的環境

この台地上において上野城及び上野城下町遺跡以前の遺跡についてあまり知られていない。僅かに知られているのが弥生時代の柿ノ木团地遺跡（3）、古墳時代の伊予之丸古墳群（4）、車坂遺跡（5）である。

そして、織豊時代に入って、天正13（1585）年に筒井定次が大和郡山から伊賀領主となり、平楽寺跡に城を築いた。その後慶長13（1608）年に筒井定次にかわり、築城の名手である藤堂高虎が伊賀・伊勢の領主となり、伊賀上野城を大改修している。

藤堂高虎は、伊賀上野城の本丸を西側に拡張し、高石垣を築き、上野城下町を整備している。

それによって現在の伊賀市都市計画の基礎を作ったといえよう。そして明治維新まで津藩藤堂氏の支配下におかれた。

今回の発掘調査地は、こうした環境のもと、城下町絵図などを参照すると侍屋敷の一角とみられる。個人蔵の享保6（1721）年の絵図面では杉立源之丞、享保7（1722）年には、杉立九郎左衛門、享保8（1723）年には、箕浦庵兵衛、宝曆4（1754）年には、葛原半太夫となり、寛政9（1797）年には、農人（農民）との記載がある。約70年間のことであるが、この屋敷地の所有者は、めまぐるしく変化している。また、城下町絵図の変遷からするとこの地域は江戸時代の後期から開発が進んだと推測できよう。

【参考文献】

伊賀市『上野市史 考古編』（2005年）

伊賀市『伊賀市史 第一巻 通史編古代・中世』（2011年）

福井健二『絵図からみた上野城』（（財）伊賀文化産業協会、2010年）

三重県埋蔵文化財センター『上野城下町道路発掘調査報告一東ノ堅町筋（第1～4次）』（三重県埋蔵文化財報告273、2006年）



第1図 遺跡位置図(1:50,000)【国土地理院発行「上野」「島ヶ原」「月ヶ瀬」「伊勢路」(1:25,000)より】



第2図 遺跡周辺地形図 (1:5,000)



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

III 遺構

1 検出層位

今回の発掘調査は、調査区が現道によって分割され、A地区は南北に細長く、B地区は平面が台形状である。次にA・B地区的基本層序についてみる。

A地区は、表土層（暗オリーブ褐色砂質土層）、黒褐色砂質土層で基盤層であるにぶい黄色粘質土層に至る。遺構の検出は、基盤層上で行った。

B地区は、表土層直下0.2mでベースであるにぶい黄色粘質土層にあたる。

2 検出遺構

検出した遺構は、古墳時代の古墳3基、江戸時代の土坑27基、区画溝2条、ピットである。主な遺構については、以下に記述する。また、その他の遺構の詳細については、遺構一覧表を参照されたい。（第1表）

（1）古墳時代

1号墳 A・B地区南側を中心検出した古墳である。平面形は、円形である。直径は15m前後とみられる。古墳は、周溝のみで埋葬主体部は確認できなかった。周溝は幅3m前後、深さ0.24～0.3mである。B地区で古墳の南側の周溝の内側に周溝と同様の溝が掘削されている。遺物は外側の周溝から須恵器杯蓋・怀身・高杯・提瓶など（1～31）が出土している。1号墳の時期は6世紀中葉とみられる。

2号墳 A地区中央付近を中心検出した古墳である。平面形は円形である。直径は約13mとみられる。古墳は、周溝のみで埋葬主体部は確認できなかった。北側の周溝は幅0.9～1.5m、深さ0.16m、南側の周溝は幅1.6～3.3m、深さ0.1～0.31mである。そして古墳の北側の周溝の内側に周溝と同様の溝が掘削されている。遺物は外側の周溝から須恵器杯蓋・土師器高杯・瓶の取手部分（32～35）が出土している。2号墳の時期は1号墳同様に6世紀中葉とみられる。

3号墳 A地区北側を中心検出した古墳である。平面形は、円形である。直径は約6mとみられる。古墳は、周溝のみ確認ができ、埋葬主体部は確認できなかった。周溝は幅0.5～1.5m、深さ0.06mである。

遺物は出土していない。

（2）江戸時代

土坑SK1 A地区南側のF10～G10区に位置する土坑である。東側は調査区外へと広がるが、平面形は不定形な長方形である。規模は、一边が2.6m以上、深さ0.34～0.43mである。遺物は陶磁器類（36～56）が出土している。遺物の時期から19世紀中葉とみられる。

土坑SK2 A地区南側のG11～12区に位置する土坑である。東側は調査区外へと広がる。平面形は、長方形である。規模は、長辺が4.92m、短辺が1.58m以上、深さ0.21～0.37mである。遺物は陶磁器類（57～79）が出土している。時期は、18世紀後半とみられる。

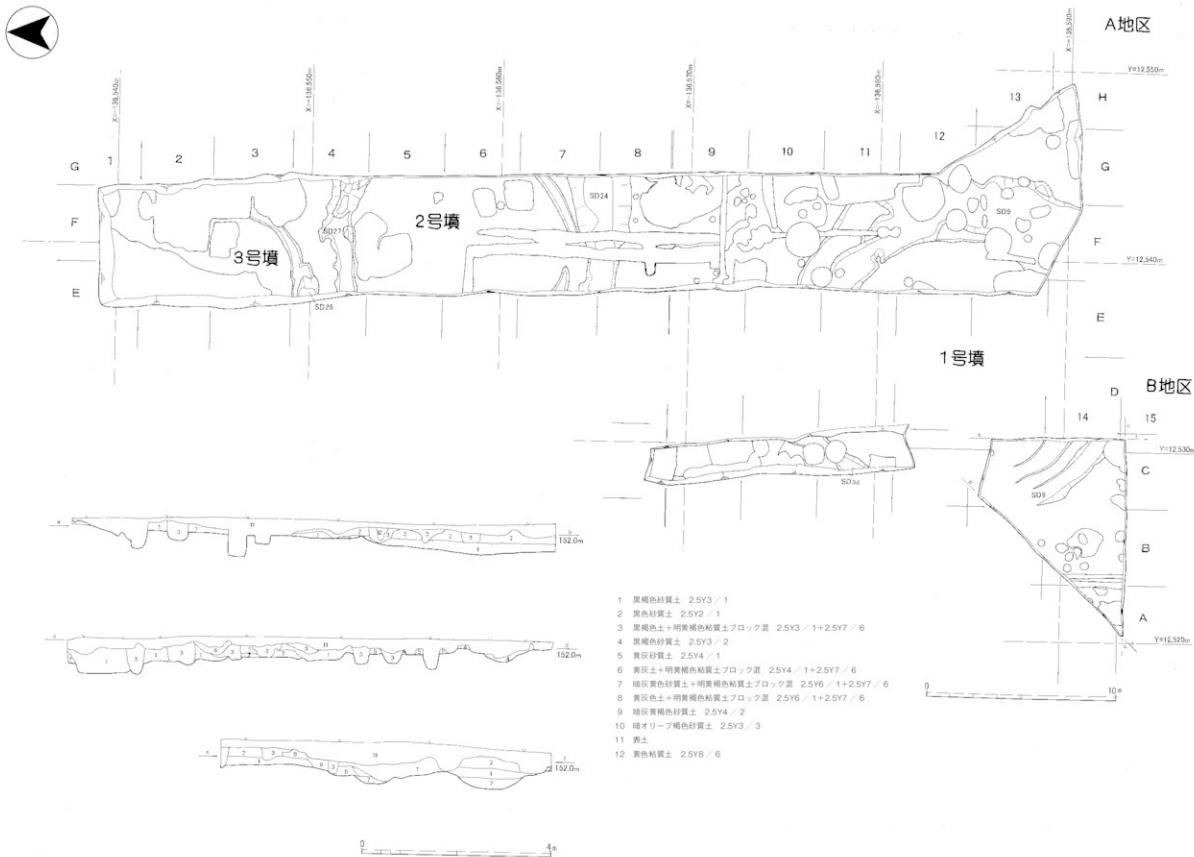
土坑SK4 A地区南側のF12区に位置する土坑である。平面形は、円形である。規模は、直径1.08m、深さ0.07mである。遺物は少ない。また、遺構底面に樽形木製品の跡とみられる痕跡を留めていた。SK4と同様の円形状の土坑（SK3・5・8・12・13・17・36・37）は、多く確認されている。遺物は、土師器培塿（84・85）が出土している。

土坑SK11 A地区南側のF～G11区に位置する土坑である。平面形は、梢円形である。規模は、径2.24m、深さ0.09～0.15mである。遺物は、土師器培塿をはじめ多くの遺物（122～189）が出土している。時期は17世紀末から18世紀後半とみられる。

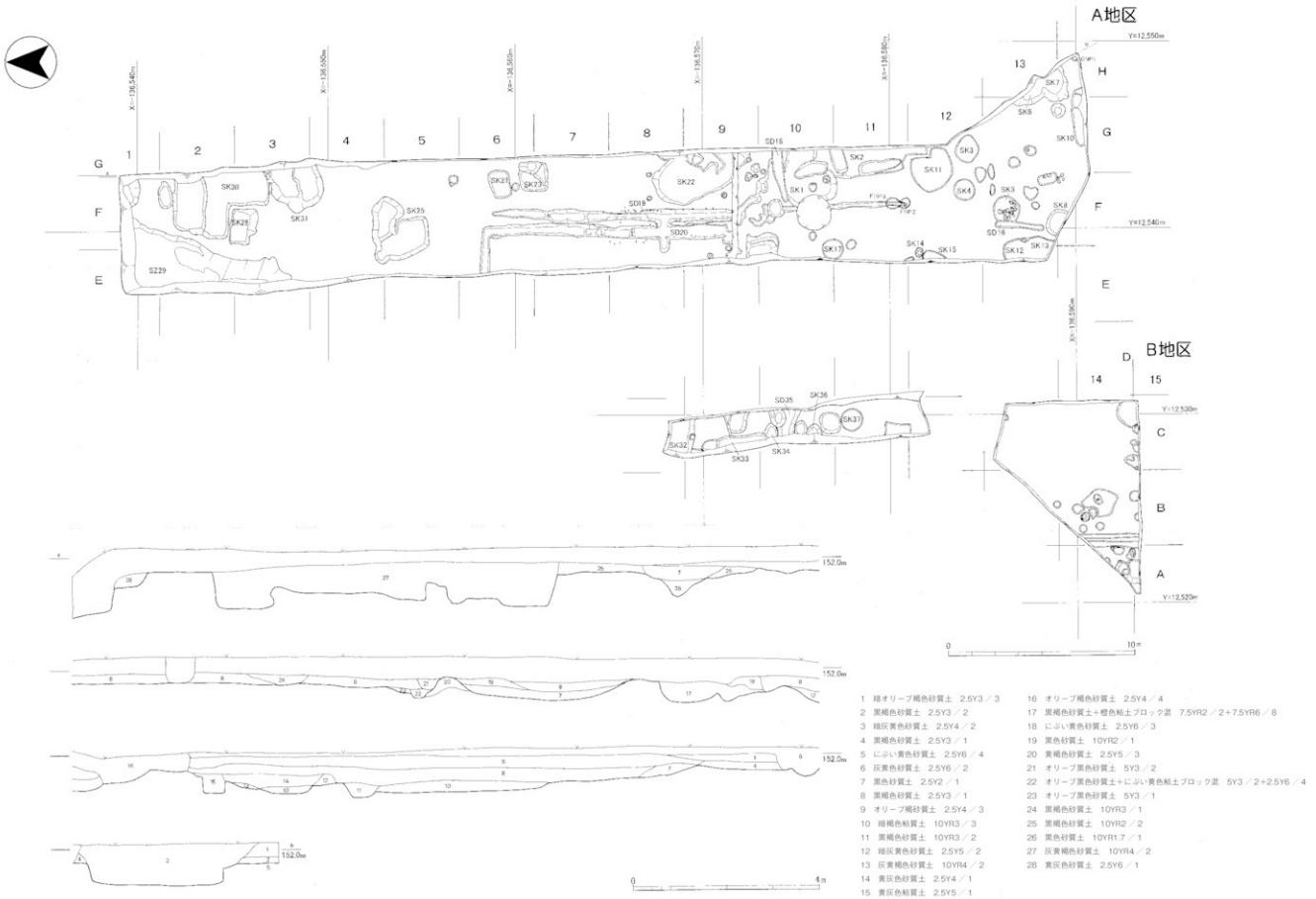
土坑SK22 A地区中央付近のF9区に位置する土坑である。平面形は、不定形のやや長方形である。土坑の一部は、調査区外である。規模は、長辺5.3m、短辺2.54m、深さ0.35～0.5mである。遺物は、（215～243）が出土している。時期は、17世紀末から18世紀後半とみられる。

土坑SK25 A地区北よりのF4～F5区に位置する土坑である。検出時には、1つの土坑とみたが遺構掘削で2つの土坑の重複と判断できる。平面形は、不定形である。全体の規模は、短辺32m、長辺3.53mである。遺物は、（251～282）が出土している。時期は、19世紀後半とみられる。

土坑SK30 A地区北よりのF3区に位置する土坑



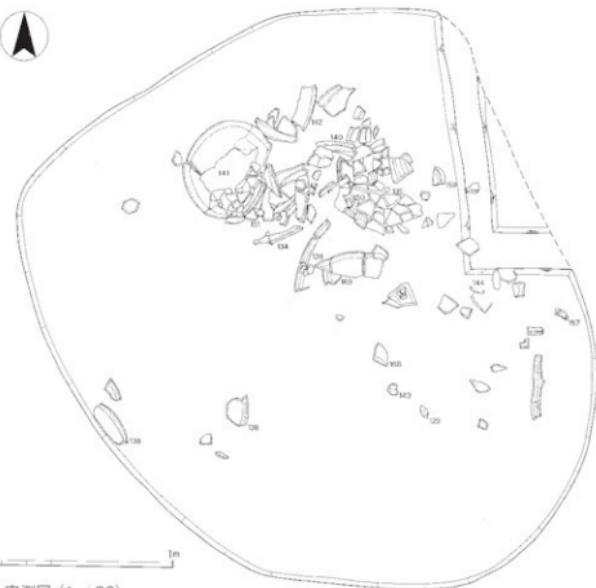
第4図 古墳時代平面図 (1／100)・B地区土層図 (1／80)



第5図 江戸時代平面図(1／100)・A地区土層図(1／80)



第6図 SD9 実測図 (B 地区) (1 / 20)



第7図 SK11 実測図 (1 / 20)

である。SK 31 の隣に位置している。平面形は、方形である。長辺 2.3 m、短辺 1.8 m、である。遺物は、陶磁器類（283～420）が出土している。時期は、19世紀中葉から後葉にかけてとみられる。土坑の性格は、粘土採掘坑の可能性も考えられる。

土坑 SK 31 A 地区北よりの F 3 区に位置する土坑である。一部は、調査区外にのびる。平面形は、円形であろうと推測できる。直径 2.8 m、深さ 0.66 m である。遺物は、須恵器をはじめとして陶磁器類（421～604）が多く出土している。時期は、19世紀中葉とみられる。

区画溝 SD 19 A 地区中央付近の F 6～9 区に位置する区画溝である。区画溝 SD 20 と同様に南北方向の溝である。規模は、幅 0.39～0.79 m、深さ 0.09～0.58 m である。溝内部には小穴が掘削されており、生垣の可能性も考えられる。遺物は、陶磁器類（688～722）が出土している。時期は、やや幅広いが 19 世紀代とみられる。

区画溝 SD 20 A 地区中央付近の F 6～9 区に位置する区画溝である。ほぼ南北方向の溝である。SD 21 とはほぼ平行で、途中 90° 西に屈曲して掘削されている。規模は、幅 0.4～0.72 m、深さ 0.1～0.37 m である。溝内部には小穴が掘削されており、生垣の可能性も考えられる。遺物は、円筒埴輪をはじめとして陶磁器類（723～780）が出土している。時期は、19世紀前半とみられる。

谷地形 SZ 29 A 地区北辺部の E 2 区に位置する谷地形である。台地に対してほぼ鋭角に食い込むように浸食している。埋土の状況から谷地形を埋め立てたと推測できる。遺物は陶磁器（664～673）が出土している。時期は 19 世紀代とみられる。従って 19 世紀代に埋め立てられたか、埋没していたと推測される。

透構番号	性格	地区名	時期	特徴・形状・規模など	備考
SK1	土坑	F～G10	江戸	不定形・長辺2.6m以上、深さ0.34～0.43m	
SK2	土坑	G11他	江戸	馬蹄形・長辺4.92m、短辺1.58m、深さ0.21～0.37m	
SK3	土坑	G12	江戸	楕円形・径1.25～1.5m、深さ0.08m	
SK4	土坑	F12	江戸	円形・径1.08m、深さ0.07m	
SK5	土坑	F13	江戸	円形・径1.5m、深さ0.11m	礫石多くみられる
SK6	土坑	F13	江戸	不定形・長辺2m、短辺0.7m、深さ0.42m	SK7と重複
SK7	土坑	G14他	江戸	長方形？・長辺1.8m、短辺1.4m、深さ0.45m	SK8と重複
SK8	土坑	F13	江戸	円形・径1.43m、深さ0.29m	
SD9	1号墳圓溝	F11他	古墳	幅3m以上、深さ0.24～0.3m	
SK10	土坑	G14	江戸	長方形・長辺3.05m、短辺0.55m以上、深さ0.05～0.39m	
SK11	土坑	F～G12	江戸	楕円形・径2.24m、深さ0.09～0.15m	
SK12	土坑	E13	江戸	円形・径1.3m以上、深さ0.23m	
SK13	土坑	E13	江戸	円形・径1.15m以上、深さ0.16m	
SK14	土坑	E12	江戸	円形・径0.45～0.5m、深さ0.13m	埋蔵
SK15	土坑	E12	江戸	長方形・長辺1.15m、短辺0.57m以上、深さ0.05m	
SD16	溝	F13	江戸	幅0.3～0.8m、深さ0.25m	SD19と一緒に溝の可能性大
SK17	土坑	E10他	江戸	円形・径1.14m、深さ0.24m	
SD18	溝	F10	江戸	幅0.3～0.54m、深さ0.13～0.37m	
SD19	溝	F6～9	江戸	幅0.39～0.79m、深さ0.09～0.58m	
SD20	溝	F6～9	江戸	幅0.4～0.72m、深さ0.1～0.37m	
SK21	土坑	F6	江戸	長方形・長辺1.52m、短辺0.7m、深さ0.21m	
SK22	土坑	F9他	江戸	不定形・長辺5.3m、短辺2.54m、深さ0.35～0.5m	
SK23	土坑	F6・7	江戸	正方形・長辺1.5m、短辺1.58m、深さ0.08～0.3m	
SD24	2号墳圓溝	F8他	古墳	幅1.6～3.2m、深さ0.1～0.31m	
SK25	土坑	F5	江戸	不定形・長辺3.2m、短辺3.53m、深さ0.24～0.3m	
SD26	3号墳圓溝	E4	古墳	幅0.55～1.5m、深さ0.09～0.18m	
SD27	2号墳圓溝	F4	古墳	幅0.9～1.5m、深さ0.18～0.45m	
SK28	土坑	F3	江戸	長方形・長辺1.84m、短辺1.33m、深さ0.07m	
SZ29	落ち込み	E2他	江戸		台地縁鄱谷地形
SK30	土坑	F3	江戸	長方形・長辺2.3m、短辺1.8m、深さ0.23～0.31m	
SK31	土坑	F3	江戸	不定円形・径2.8m、深さ0.66m	
SK32	土坑	B8	江戸山跡	埋蔵不明	
SK33	土坑	B9	江戸	長辺2.83m以上、深さ0.39m	
SK34	土坑	B10	江戸	長辺0.7m以上、深さ0.12m	
SD35	溝	B10	江戸？	幅1m以上、深さ0.26m	
SK36	土坑	B10	江戸	長辺0.8m、深さ0.17m	
SK37	土坑	B11	江戸	径1.15m、深さ0.26m	
SD38	溝	B11	古墳	幅0.9m、深さ0.14m	i号墳の周溝と考えられる

第1表 透構一覧表

第IV章 遺物

今回の発掘調査による遺物の出土量は整理をしてコンテナパットで50箱になり、重量では、187.2kgになる。また、遺物は江戸時代後期の陶磁器類が主で、古墳時代後期の須恵器をはじめとして円筒埴輪などが僅かに出土している。また、古墳時代の遺物は、周溝と江戸時代後期の遺構から出土している。

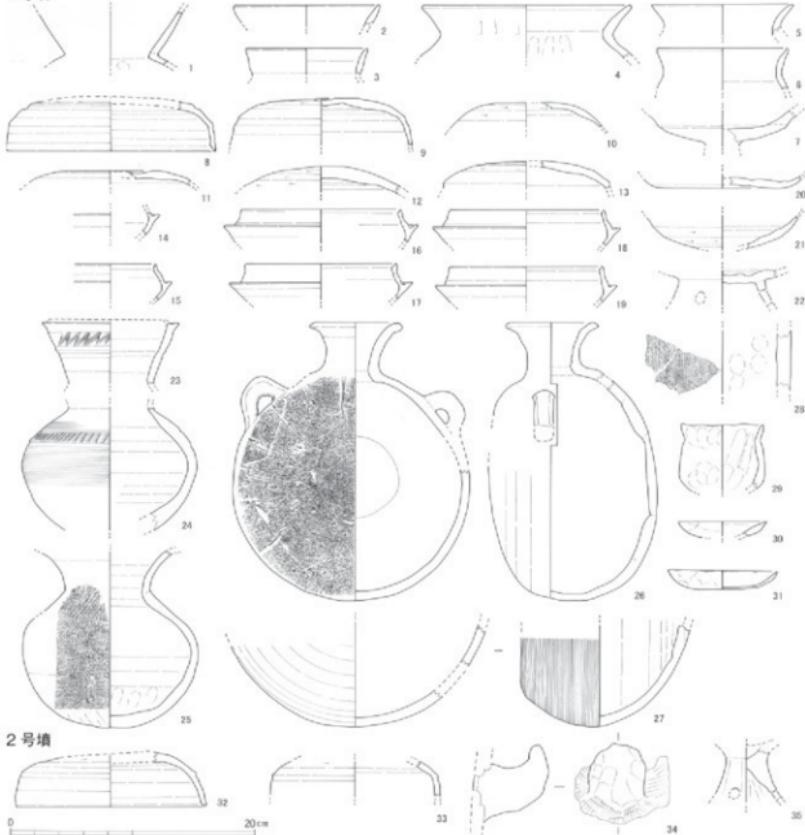
以下に、出土遺物の特徴を主に遺構ごとに記述する。遺物の個々の詳細については、遺物観察表（第2表～第12表）を参照されたい。遺物は、第8～

35図に掲載した。

1 古墳時代

1号墳出土遺物（SD9） 土師器壺（1）・壺（2～6）・高杯（7）・須恵器杯蓋（8～13）・杯身（14～20）・高杯（21～22）・壺（23～25・28）・提瓶（26・27）・ミニチュア土器（29）がある。土師器壺・壺は残存が口縁部ばかりである。須恵器も全体的に残りはよくなく提瓶のみがほぼ完存である。遺物の

1号墳



第8図 出土遺物実測図(1)

時期は、TK 10型式併行期で6世紀中葉とみられる。
2号墳出土遺物 (S D 24・27) 須恵器杯蓋 (32・33)、土師器瓶の取手部分 (34)・高杯 (35)がある。全て全体的に残りはよくない。遺物の時期は、TK 10型式併行期で6世紀中葉とみられる。

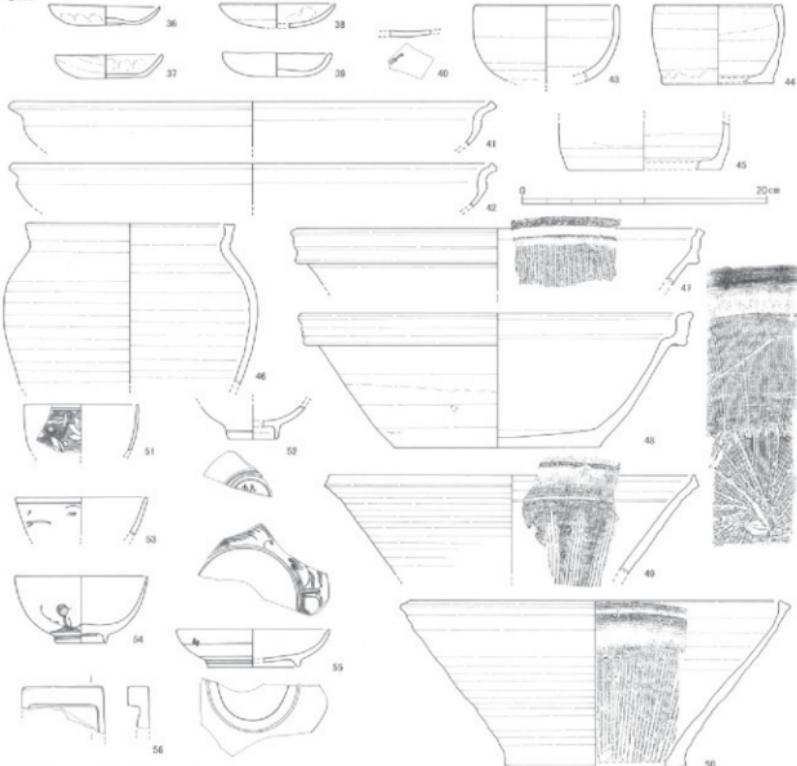
2 江戸時代

土坑SK 1出土遺物 土師器皿 (36～40)・焰烙 (41・42)・陶器挽 (43)・甕 (44・45)・壺 (46)・擂鉢 (47～50)・磁器挽 (51～54)・皿 (55)・石硯 (56)がある。土師器皿は、灯明皿である。40は、墨書きがなされているが読むことはできない。土師器焰烙 (41・42)は、南伊勢系土師器鍋の系譜を引くものとみられる。43は、瀬戸・美濃の丸挽で登窯2・

3小期の17世紀前半とみられる。残りの陶器類は、全て伊賀・信楽焼である。中でも48・49は擂鉢は信楽焼でそれぞれ48は19世紀中頃、49は17世紀後半のもの。磁器は、大半が有田焼 (伊万里焼)である。51は、内山のもので唐花の文様があしらわれており、17世紀第3四半期に位置するもの。53は、蝶の文様で17世紀第2四半期のもの。54は、外山 (波佐見)のもので文様は雪輪文、18世紀後半のもの。55は、文様は竹と梅、17世紀末～18世紀初頭のもの。56は、方形硯で、石材は黒色粘板岩である。

土坑SK 2出土遺物 土師器皿 (57)・焰烙 (58・59)・陶器挽 (60～62)・大皿 (63)・火入 (64)・鉢 (65～69)・甕 (70・71)・擂鉢 (72)・磁器挽 (73～78)・皿 (79)がある。57は灯明皿である。59は

SK1



第9図 出土遺物実測図(2)

南伊勢系のものであろうが、58は異なる系譜を引くものであろう。63は波状文が口縁部内面と内面底部に通り、非常に精緻なものである。73・74は、小椀、73は、18世紀中葉～後葉のもの。74も18世紀中葉～後葉のもの。75は、文様が草花文で、17世紀末～18世紀初頭のもの。76は18世紀中葉～後葉のもの。77は、白磁碗で18世紀中葉～後葉のもの。78は、文様に草が描かれる。17世紀末～18世紀初頭のもの。

土坑SK3出土遺物 須恵器杯蓋(80)・土製品(81)がある。須恵器杯蓋は、1号墳のものであろう。土製品は、大黒天である。首から上だけである。

土坑SK4出土遺物 土師器皿(82)・焰烙(83)・七匣(83)・陶器鉢(85)がある。82は灯明皿、83は、南伊勢系の焰烙、84は、七匣の底部とみられる。

土坑SK5出土遺物 土師器皿(86～89)・焰烙(90)・陶器猪口(91)・椀(92)・甕(93)がある。土師器皿は、灯明皿である。90は、南伊勢系のもの。91は、伊賀焼のもの。

土坑SK6出土遺物 土師器小型丸底壺(94)・陶器壺(95)がある。94は、1号墳からのものであろう。

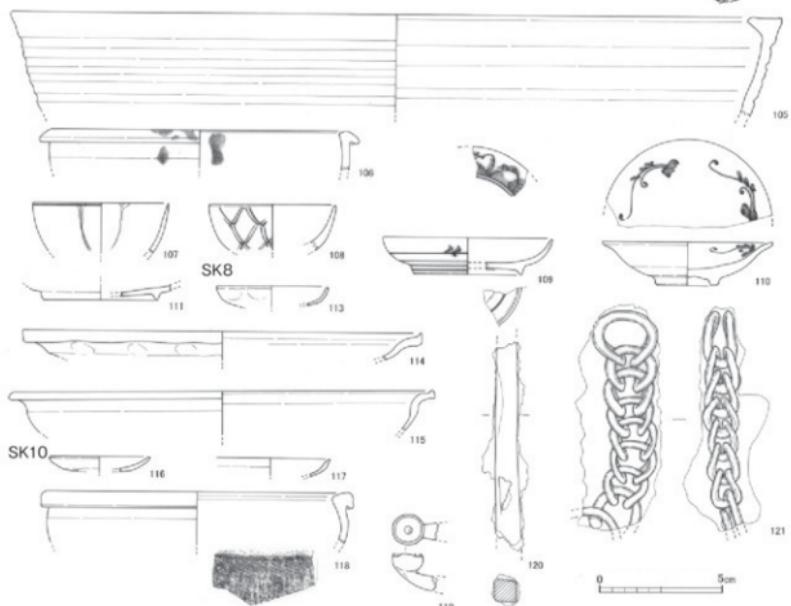
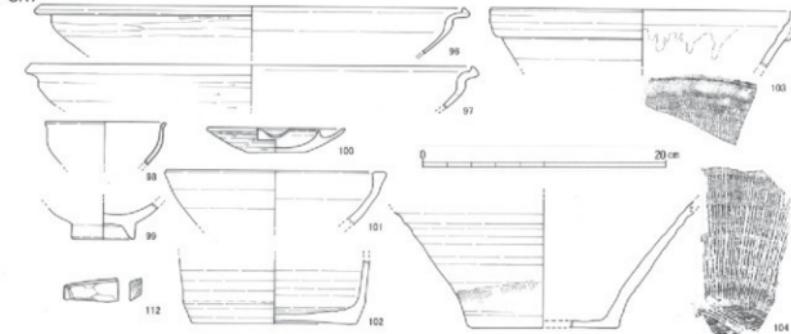
土坑SK7出土遺物 土師器焰烙(96・97)・陶器椀(98・99)・灯明受皿(100)・鉢(101・102)・罐



第10図 出土遺物実測図(3) (81は1:2)

鉢（103・104）・水甕（105）・練鉢（106）・磁器椀（107・108）・皿（109～111）・砥石（112）がある。98は、瀬戸の天目茶碗、登窯2・3小期である。107は、肥前で焼き繼ぎ痕跡を留める。18世紀頃。108は、外山のもの。文様は二重網目文、18世紀中葉～後葉にかけてのもの。109は、17世紀末のもので元禄期の文様。110は、初期伊万里で17世紀第2四半期のもの。蔓草の文様で重ね焼きの痕跡を留める。111は、

SK7



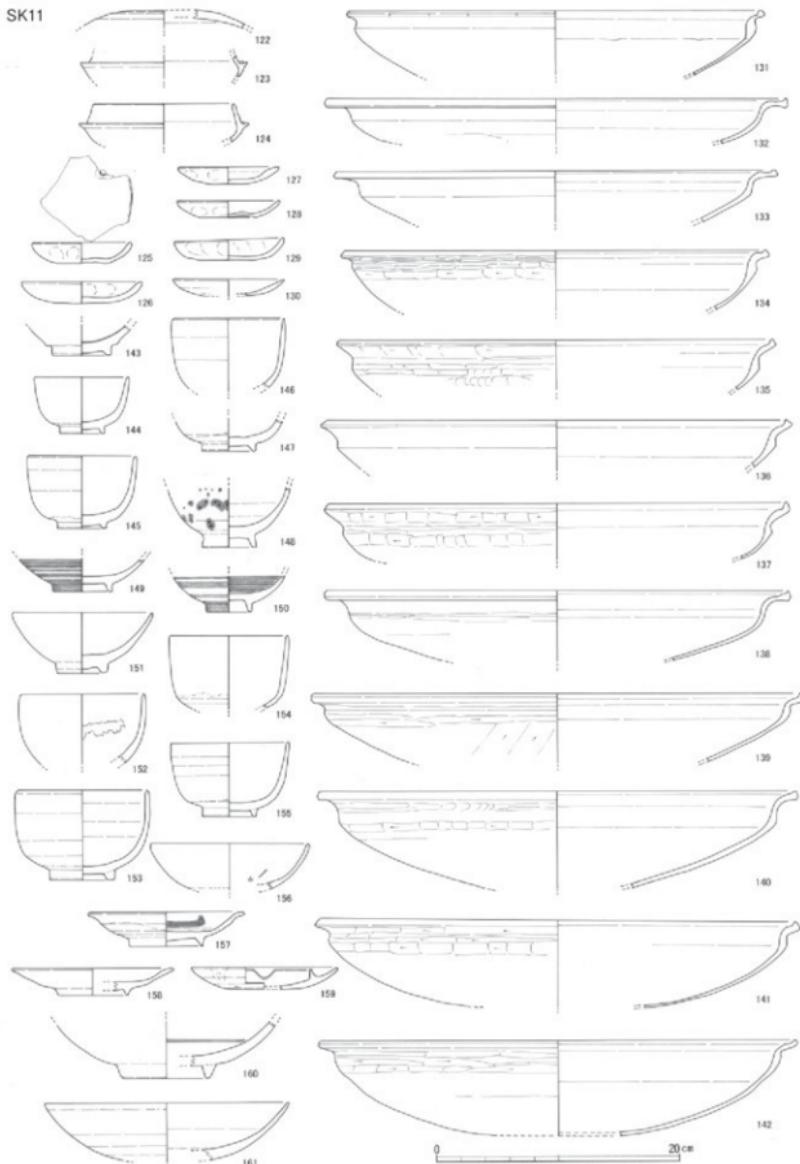
第11図 出土遺物実測図(4) (119・120・121は1:2)

白磁皿の底部、17世紀第3四半期のもの。

土坑SK8出土遺物 土師器皿（113）・焰烙（114・115）がある。焰烙は、南伊勢系のもの。

土坑SK10出土遺物 土師器皿（116・117）・陶器擂鉢（118）・煙管雁首（119）・鉄製品（120・121）がある。120は、釘。121は、兵庫鎖。

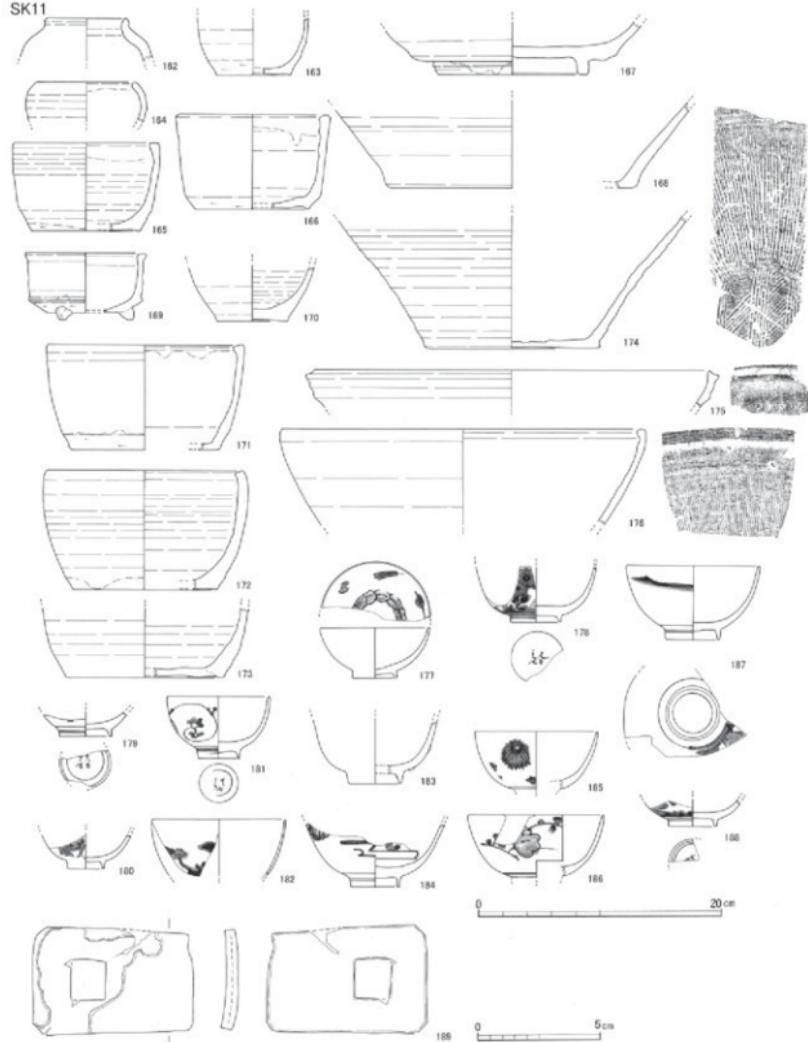
土坑SK11出土遺物 須恵器杯蓋（122）・杯身（123・124）・土師器皿（125～130）・焰烙（131～



第12図 出土遺物実測図(5)

142)・陶器椀 (143～156)・皿 (157～158)・灯明受皿 (159)・壺 (162～164)・火入 (165・166)・鉢 (160・167・168)・擂鉢 (174～176)・香炉 (169)・磁器碗 (177～188)・鉄製品 (189) がある。須恵器は、1号墳のものとみられる。遺物の時期は、17世紀末～

SK11

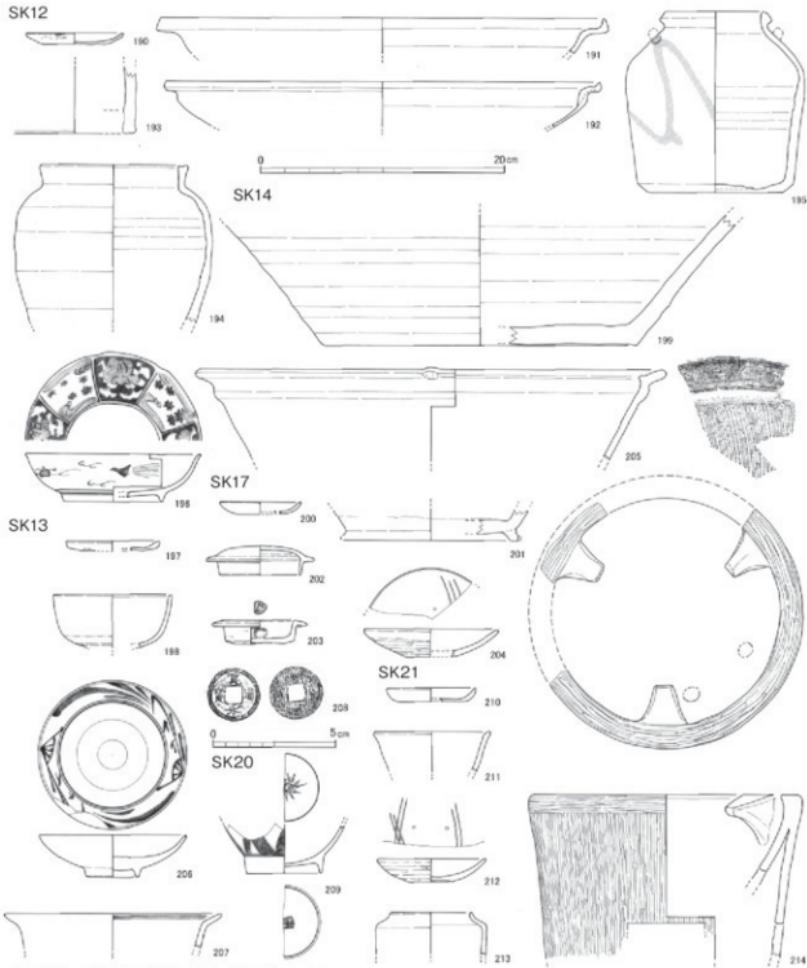


第13図 出土遺物実測図(6) (189は1:2)

18世紀初頭のものが中心をしめる。土器盤皿は灯明皿、培培は、南伊勢系のもの。143は、瀬戸の天目茶碗、登窯3・4小期である。144は美濃の小椀、6・7小期である。145・147は、瀬戸の丸椀、登窯7小期である。148・149は、肥前の陶器椀、共に17世

紀末とみられる。153～155は、瀬戸の陶器碗で登窯4小期、17世紀末から18世紀初頭のもの。157は、瀬戸の輪禿皿、登窯5期である。158は、瀬戸美濃で、登窯1・2小期である。160は、肥前の陶胎染付の鉢で、18世紀前半のもの。161は、肥前の皿で17世紀末のもの。177～188は、全て肥前の碗。177は、子供茶碗で文様は、羽子板・小桜・分銅である。17

世紀末～18世紀初頭のもの。178は、文様が草花文で17世紀末～18世紀初頭のもの。179・180・182・185・188も178と同様の時期である。181は、外山のもの、文様は唐草、17世紀末のもの。183は、初期伊万里、17世紀第2四半期のもの。184は波佐見のもので18世紀後半とみられる。189は、方形の透孔を持つ鉄板、用途不明のもの。パックルの可能性



第14図 出土遺物実測図(7) (208は1:2)

もある。

土坑SK12出土遺物 土師器皿(190)・培培(191～192)・七厘(193)・陶器壺(194～195)・磁器皿(196)がある。196は、肥前の有田丸山のもの、文様は、鳳凰、紅葉、唐草、立田川である。18世紀前半のもの。

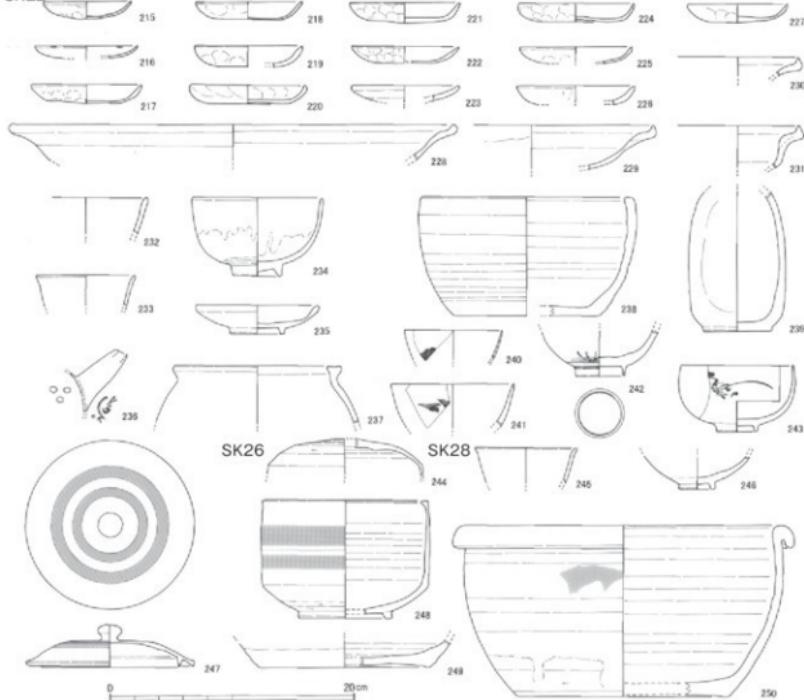
土坑SK13出土遺物 土師器皿(197)・陶器碗(198)がある。197は灯明皿である。

土坑SK14出土遺物 陶器壺(199)がある。

土坑SK17出土遺物 土師器皿(200)・鉢(201)・陶器蓋(202・203)・灯明皿(204)・擂鉢(205)・磁器皿(206)・鉢(207)・錢貨(寛永通宝)(208)がある。200は灯明皿である。206は、波佐見のもの、文様は扇面文である。18世紀後半のもの。207は、肥前で青磁染付、18世紀後半のもの。

土坑SK20出土遺物 磁器椀(209)がある。209は肥前の廣東椀、文様は蓮で18世紀後半のもの。

SK22



第15図 出土遺物実測図(8)

土坑SK21出土遺物 土師器皿(210)・陶器椀(211)・灯明皿(212)・陶器壺(213)・瓦質風炉(214)がある。

土坑SK22出土遺物 土師器皿(215～227)・培培(228～231)・陶器椀(232～234)・皿(235)・土瓶(236)・壺(237)・鉢(238)・花入(239)・磁器椀(240～243)がある。234は、美濃の尾呂茶椀、7期のもの。240～243は肥前の椀で、240は18世紀前半のもの。242は波佐見のもので18世紀後半～19世紀初頭のもの。

土坑SK26出土遺物 須恵器杯蓋(244)がある。2号墳のものが混じりこんだとみられる。

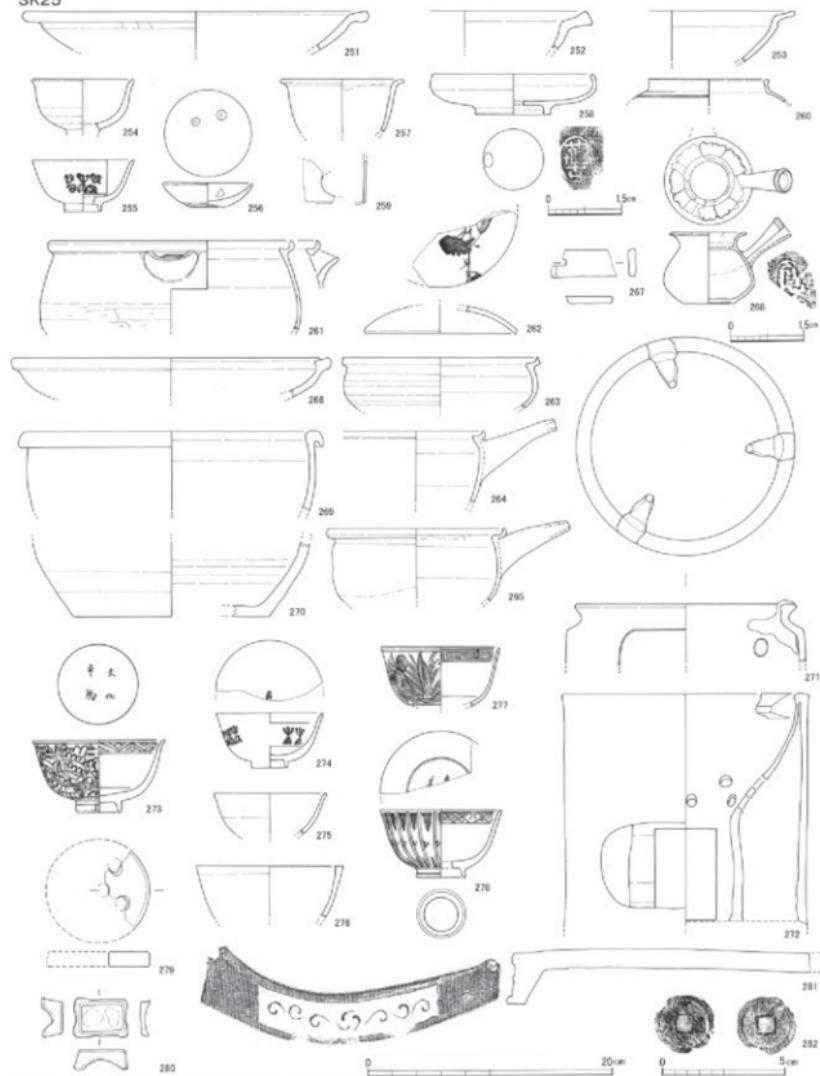
土坑SK25出土遺物 土師器培培(251～253)・陶器椀(254・255)・灯明皿(256)・鉢(257)・皿(258)・茶筒(259)・急須(260・268)・行平鍋(261・263～265)・行平鍋蓋(262)・盤(266)・十能(267)・

SK29

縁鉢 (269)・鉢 (270)・土師器涼炉 (271・272)・磁器碗 (273～278)・土師器七厘さな (279)・土製品机 (280)・軒平瓦 (281)・銭貨 (寛永通宝) (282)がある。255は、瀬戸美濃の端反椀、文様は隸字体文、SK25

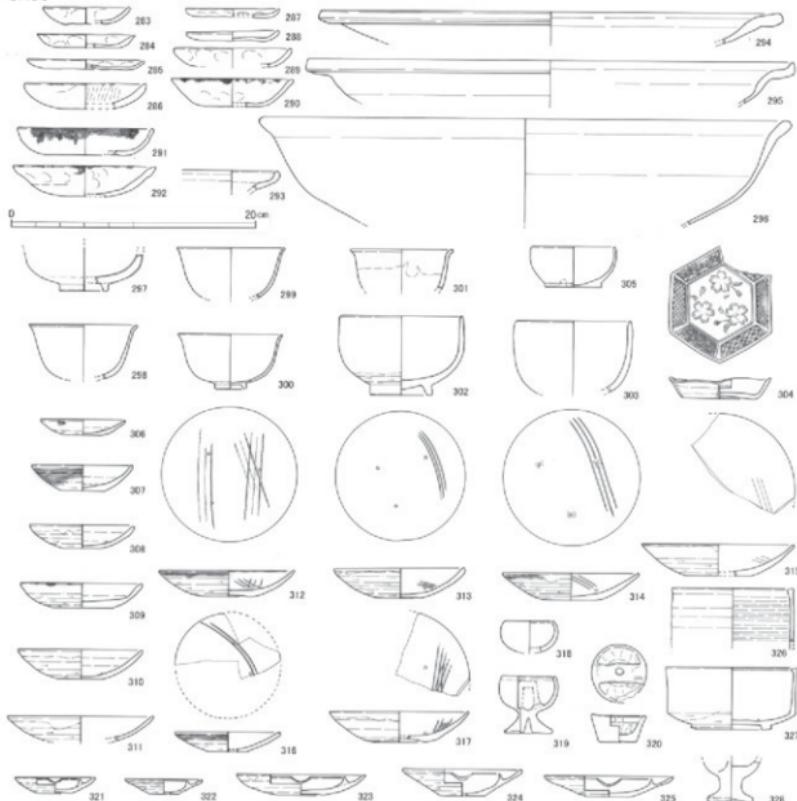
19世紀中葉とみられる。273・274・278は、瀬戸美濃の磁器碗で19世紀中葉である。

土坑SK28出土遺物 陶器碗(245・246)・蓋(247)・鉢(248・249)・捏鉢(250)がある。



第16図 出土遺物実測図(9) (258・268拓影は1:1、282は1:2)

土坑 SK 30 出土遺物　土師器皿 (283 ~ 292)・
焰焼 (293 ~ 296)・陶器椀 (297 ~ 303・305)・皿 (304)・
灯明皿 (306 ~ 317)・乗場 (318・319)・灯明台 (320)・
灯明受皿 (321 ~ 325)・香炉 (326 ~ 327)・仏飯具
(328)・蓋 (329 ~ 331)・土瓶 (332 ~ 333)・行平鍋蓋
(334 ~ 341)・行平鍋 (342 ~ 346)・茶筒 (347)・鉢
(348 ~ 351)・擂鉢 (352 ~ 355)・徳利 (356)・花生
(357)・植木鉢 (358 ~ 360)・鉢 (361 ~ 369)・甕
(370 ~ 373)・水滴 (374)・七厘さな (375)・加工円盤 (376)・土製品 (377・378)・軒丸瓦
(379 ~ 380)・軒平瓦 (381 ~ 389)・磁器椀 (390 ~ 409)・皿 (410 ~ 413)・蓋 (414 ~ 415)・鉢 (416)・
紅猪口 (417)・仏飯具 (418)・甕 (419)・石硯 (420)
SK30

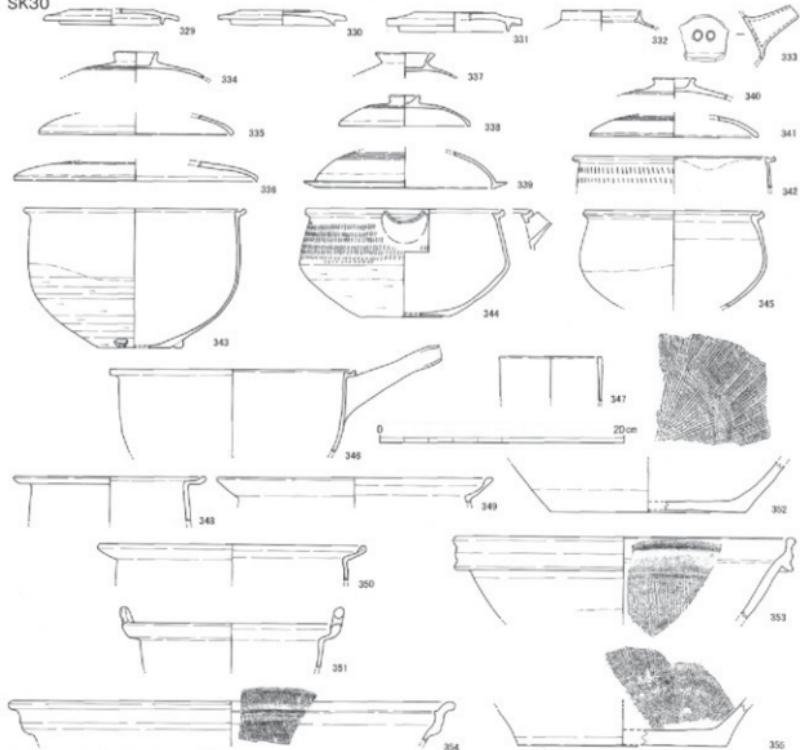


第17図 出土遺物実測図 (10)

がある。297は、瀬戸美濃の天目茶碗、8・9小期のもの。302は、美濃の陶器椀、8小期。309は、美濃の灯明皿、7・8小期で18世紀後半のもの。328は、肥前の仏飯具、18世紀後半から19世紀前半のもの。374は、水滴とみられ獅子の口の部分に穿孔がみられる。377の土製品で鱗の痕跡を留めており、鯉や鮎の淡水魚もしくは、海水魚とみられる。379・380は、軒丸瓦で巴文である。380は中央部に穿孔の痕がみられる。392・395・398・413・415は、瀬戸美濃の磁器、他は、肥前のものである。392の時期は、第10小期。395は端反挽、19世紀初頭のもの。413は形打皿、第11小期の19世紀中頃のもの。398・415は、明治期。396は、外山のもので筒形椀である。雪輪

文が施される。393・399・402・405・407は広東椀、18世紀後半から19世紀初頭のもの。400・403・406は、くらわんか椀、時期は広東椀と同様である。397・404は、端反椀で19世紀中葉のもの。409は、内山のもので18世紀後半である。染付に上絵付けが施され、金彩が成される。411は、波佐見のもので18世紀末から19世紀初頭にかけてのもの。414は清朝磁器の特徴を有している。外面に雷文を内面に草花文が施される。19世紀前半のもの。417は、小杯、つる草の文様が施される。19世紀前半のもの。417は仏飯具、割菊の文様が施され、18世紀末から19世紀中葉のもの。

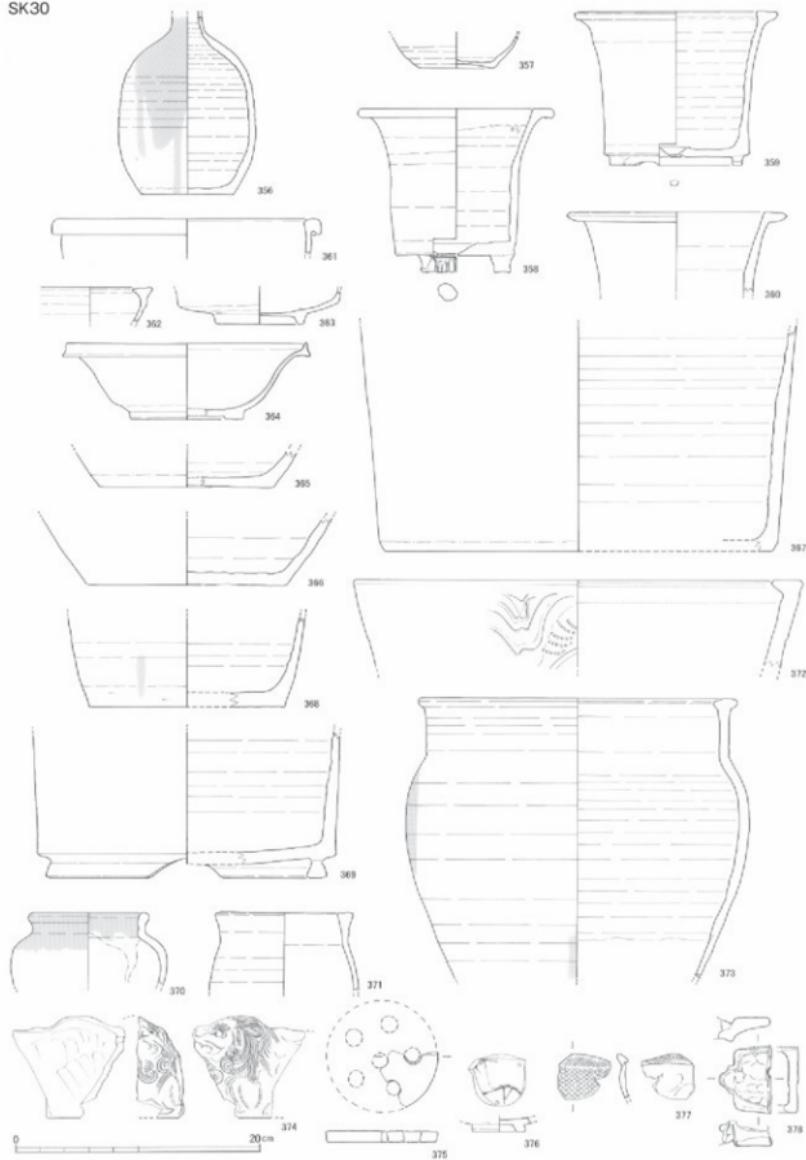
土坑SK31出土遺物 須恵器杯身 (421～423)・土師器椀 (424)・土師器皿 (425～429)・焰燈 (430～433)・土師器小杯 (435～437)・陶器杯・椀 (434・SK30)



第18図 出土遺物実測図 (11)

438～444)・灯明皿 (445～460)・灯明受皿 (461～463)・台付灯明受皿 (464～466)・徳利 (467～468)・花生 (469)・香炉 (470～472)・馬の目皿 (473～474)・水注 (475～476)・茶入蓋 (477)・壺 (478)・紅猪口 (479・480)・神酒徳利 (481)・神仏具椀 (482・483)・仏飯具 (485～488)・蓋 (489～491)・茶釜蓋 (492)・急須 (493～497)・行平鍋蓋 (498～501)・行平鍋 (505～510)・土瓶蓋 (511～513)・土瓶 (514～517)・擂鉢 (518)・鍋 (519)・鉢 (520・521)・植木鉢 (522)・捏鉢 (523～525)・火消壺蓋 (526)・振炉 (527)・風炉 (528・529)・七厘さな (530・531)・加工円盤 (532)・土製品 (533)・軒丸瓦 (534)・甕 (535～542・544)・壺 (543～546)・磁器杯・椀 (547～576)・徳利 (577)・蕎麦猪口 (578)・紅皿 (579～581)・蓋 (582～590)・皿 (591～596)・鉢 (597・598)

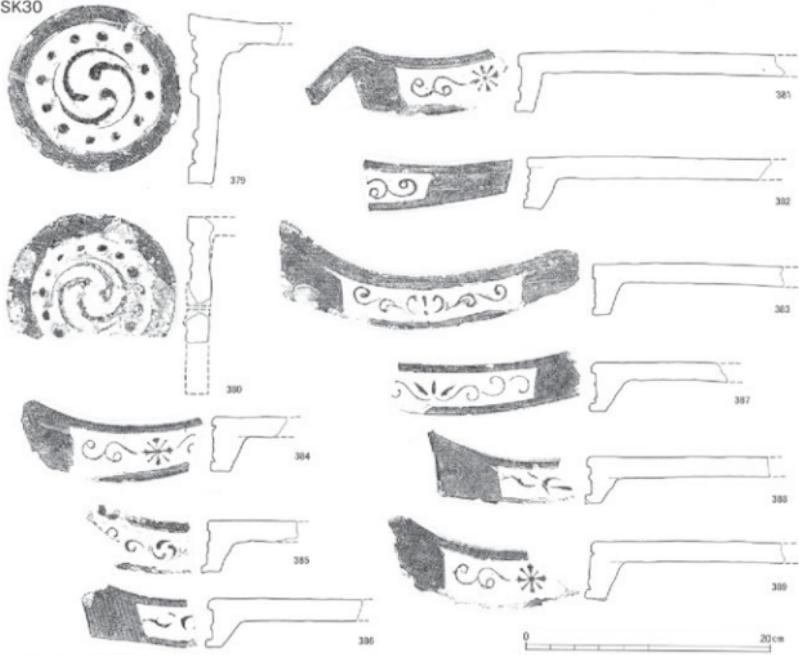
SK30



第19図 出土遺物実測図(12)

598・602)・段重(599・600)・合子(601)・鉄鎌(603)・不明鉄製品(604)がある。421～424のものは、3号墳のものであろう。6世紀中葉のもの。434は、天目茶碗、登窯3・4小期のもの。440は、小杉椀で18世紀中頃のもの。468は、徳利。底部に「宗」の墨書きがされる。人物名であろうか。473・474は瀬戸の馬の目皿。8小期の19世紀代のもの。477は、肥前のもの。軟質である。497は、急須である。素焼きのものである。底部に「いか」の刻印が押されている。505は、行平鍋の把手部分である。刻印は、濱れており「宮」の一文字が認める。513は、急須の蓋と思われる。摘手部分は獅子であろうか。516は、土瓶である。緑釉が掛けられ、底部に「いか」の刻印が押されている。今後、伊賀焼の指標となる資料である。517は、彩色豊かなものである。万古焼であろうか。523は、捏鉢で底部に墨書きがされている。墨書きは「ゼニ上分」と読むことができる。錢を上納する意味であろう。526は、火消壺の蓋である。

SK30



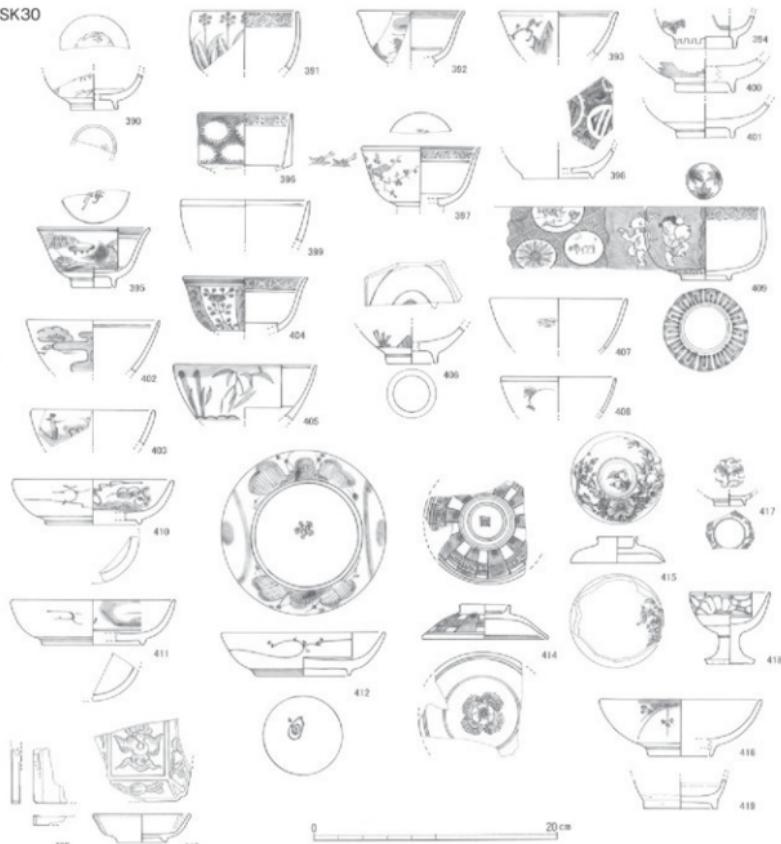
第20図 出土遺物実測図(13)

る。ミガキが施され丁寧な作りである。533は、土製品で仏像か神像の一部であろう。534は、軒丸瓦で家紋があしらわれている。542は、甕である。底部に墨書きがされている。「巳とし」と読むことができる。548～550・554・555・558～562・565・568・571・585・586・589は、瀬戸美濃の磁器で、他は肥前の磁器である。547は、金彩で丸に四方欠いた四角が施される。酒杯であろう。548～550は、猪口で19世紀中葉から後半のもの。551は貿易陶磁器で、中国福建省のもの。554・561・562は、小椀で龍が本型打込で描かれる19世紀中葉のもの。558・560は、19世紀初頭のもの。559は、高台部がやや尖る、19世紀初頭のもの。556・557は、ほぼ同じ扇形文と草花文の文様が描かれる。19世紀第1～2四半期のもの。563は端反椀で、鷺や恵比須が描かれ、19世紀代のもの。564は、梅花の文様が描かれるが、焼きがやや不十分である。18世紀中葉～後葉のもの。566は、19世紀代のもの。567は、微塵唐草が描かれ、

19世紀中葉のもの。569・570・575・576は広東椀、18世紀末から19世紀初頭のもの。576は、やや粗製である。572は、くらわんか椀で、18世紀後半のもの。573は、青磁椀である。573は、焼繼痕跡を留める。19世紀中葉のもの。578は、葵麦猪口で18世紀後半のもの。579～581は、紅皿で19世紀代である。585・586・589は、瀬戸の端反椀の蓋、花唐草が描かれ、第10小期の19世紀中葉のもの。582・584・587・588・590は、肥前の望料椀の蓋である。18世紀後半ないし末から19世紀初頭のもの。591～602は、全て肥前の磁器である。591・592は、蛸唐草文

が描かれ、18世紀末～19世紀初頭のもの。592は、蛇の目高台である。593は、波佐見のもので草花文が施される。18世紀末～19世紀初頭のもの。594は、底部のみである。筒形椀であろうか。18世紀末～19世紀初頭のもの。595は、18世紀末のもの。596は、志田窯のものであろうか。19世紀前半～中葉のもの。597は、八角鉢、蛇の目高台で巻物が描かれ、19世紀中葉のもの。598は、焼繼痕跡を留める。19世紀後半のもの。599・600は段重で、599は18世紀末～19世紀初頭、600は19世紀前半～中葉のもの。601は、19世紀代のもの。602は19世紀前半のもの。

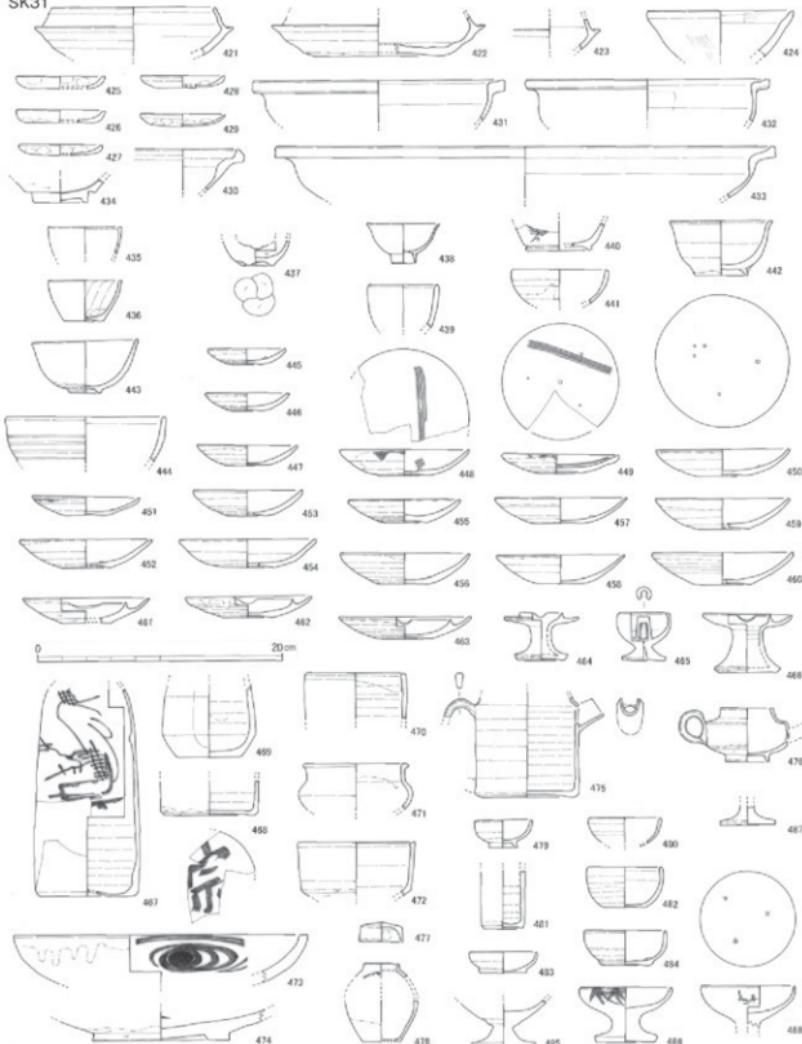
SK30



第21図 出土遺物実測図(14)

土坑 S K 32 出土遺物 陶器鉢 (605)・磁器徳利 (606)・椀 (607) がある。606は、肥前で神酒徳利。19世紀前葉のもの。607は、瀬戸の広東椀。陶胎染付である。19世紀前半のもの。

SK31



土坑 S K 33 出土遺物 土師器皿 (608～614)・
培焰 (615～618)・陶器椀 (622～623)・灯明皿 (619
～621)・花生 (624)・鉢 (625)・蓋 (626)・植木鉢
(627)・餌猪口 (628)・火鉢 (629)・徳利 (630)・土

第22図 出土遺物実測図 (15)

瓶 (631)・擂鉢 (632)・磁器杯・椀 (633～641)・蓋 (643)・皿 (642・644～646)・土製品 (647～650)・鉄製品釘 (651) がある。639は広東椀、陶胎染付で18世紀末～19世紀初頭のもの。他の磁器は全て肥前のもの。633は、小猪口で環珞文が施される。18世紀後半のもの。634は、竹の文様が施され、18世紀後半～19世紀初頭のもの。635は、18世紀後半のもの。636は、波佐見のくらわんか椀、梅花文が施され、18世紀後半のもの。637は、やや粗製で、二重網目文が施される。18世紀中葉～後葉のもの。638～640は、広東椀、640は削菊文、641はつる草文が施され、全て18世紀末～19世紀初頭のもの。643は、望料椀蓋で18世紀末～19世紀初頭のもの。645は、やや粗製で、藤棚文が描かれる。18世紀後半のもの。646は、有田南河原のもので柿右

衛門の型打皿。17世紀末のもの。647～649は、不明土製品である。650は、土製品で福禄寿である。

土坑 S K 34 出土遺物 土師器皿 (652)・陶器鉢 (653)・磁器椀 (654) がある。654は、肥前の広瀬窯の青磁椀、18世紀後半～19世紀初頭のもの。

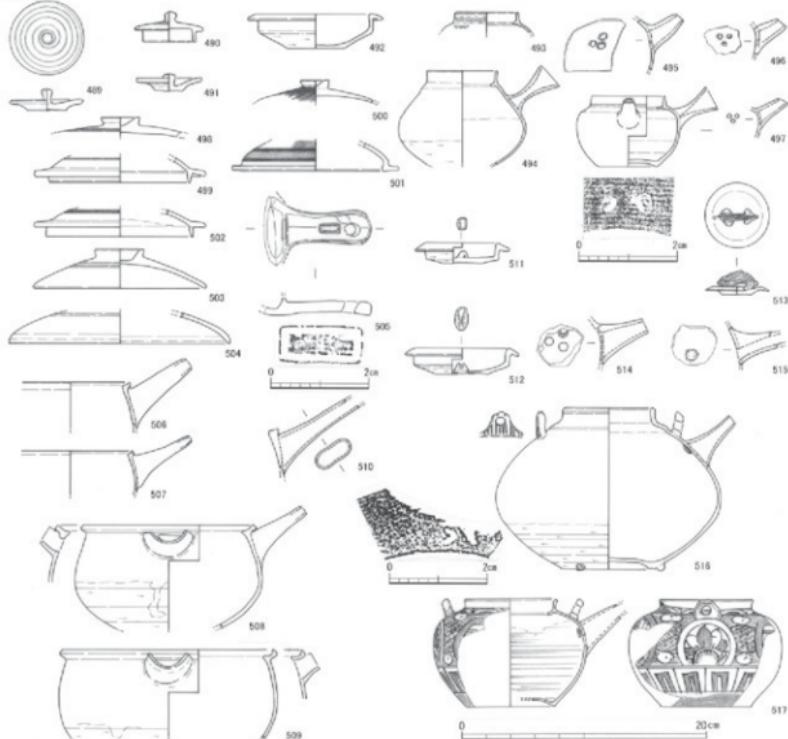
土坑 S K 35 出土遺物 陶器擂鉢 (655) がある。

土坑 S K 36 出土遺物 土師器高杯 (656)・陶器小杯 (657)・椀 (658)・磁器椀 (659)・陶器擂鉢 (660) がある。657は、肥前陶器で白磁、18世紀後半～19世紀初頭のもの。659は、広東椀で19世紀前葉のもの。

土坑 S K 37 出土遺物 土師器皿 (661)・磁器椀 (662) がある。662は、瀬戸のもので近代。

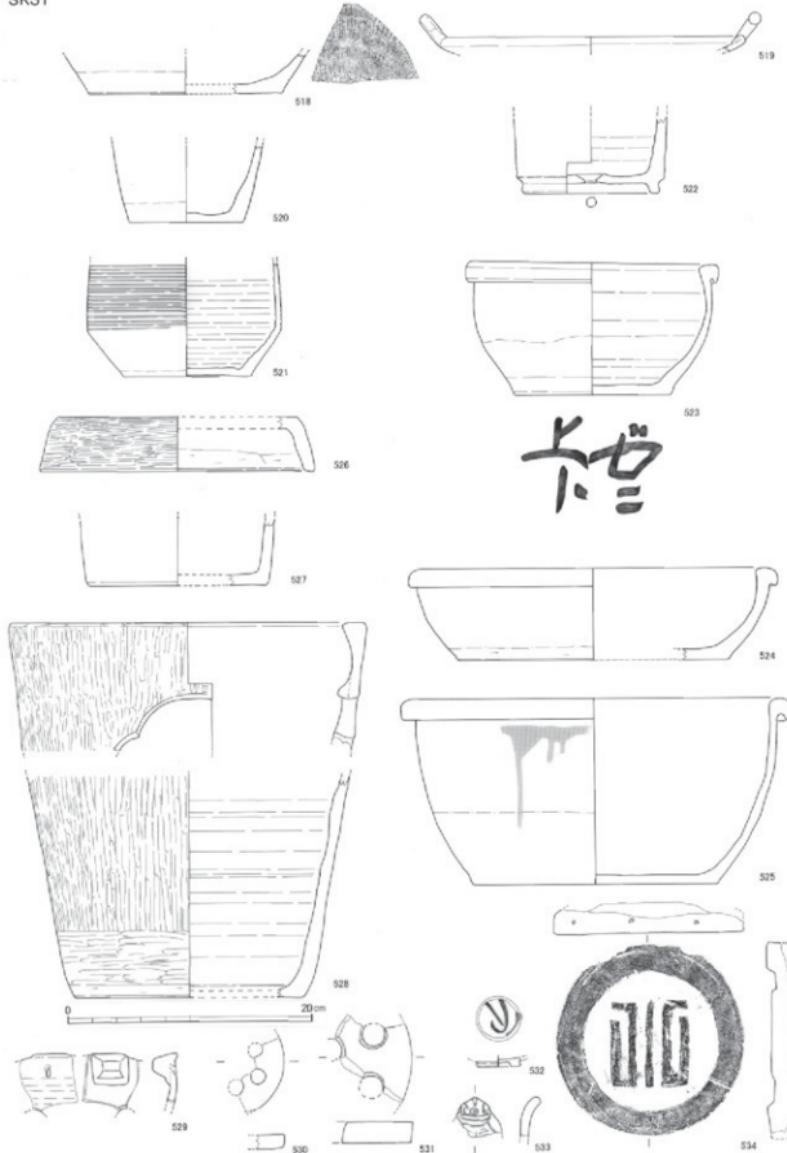
谷地形 S Z 29 出土遺物 土師器壺 (664)・皿 (665～668)・陶器壺 (669)・皿 (670)・火鉢 (671)・壺 (672・673)・磁器皿 (674)・蓋 (675)・七匣さな (676)

SK31



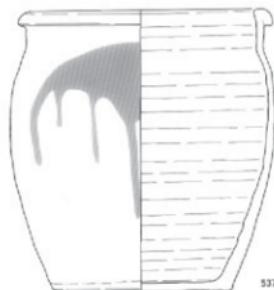
第23図 出土遺物実測図 (16) (497・505・516 拓影は 1:1)

SK31



第24図 出土遺物実測図 (17)

SK31



537

535

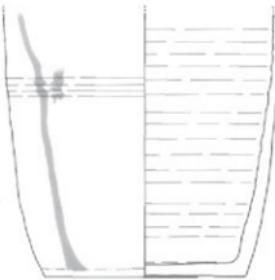
539

540

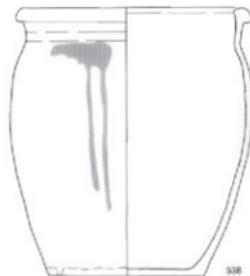
541



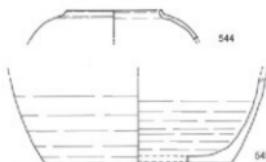
541



542



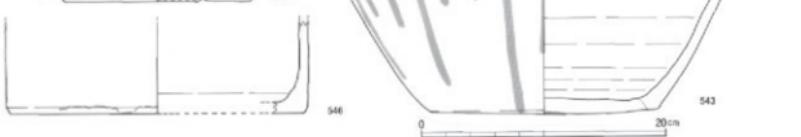
538



544



545



0

第25図 出土遺物実測図 (18)

がある。673は、高台のある水甕、瀬戸の登窯第8小期のもの。675は、肥前の端反椀の蓋で龍が描かれる。19世紀前半のもの。

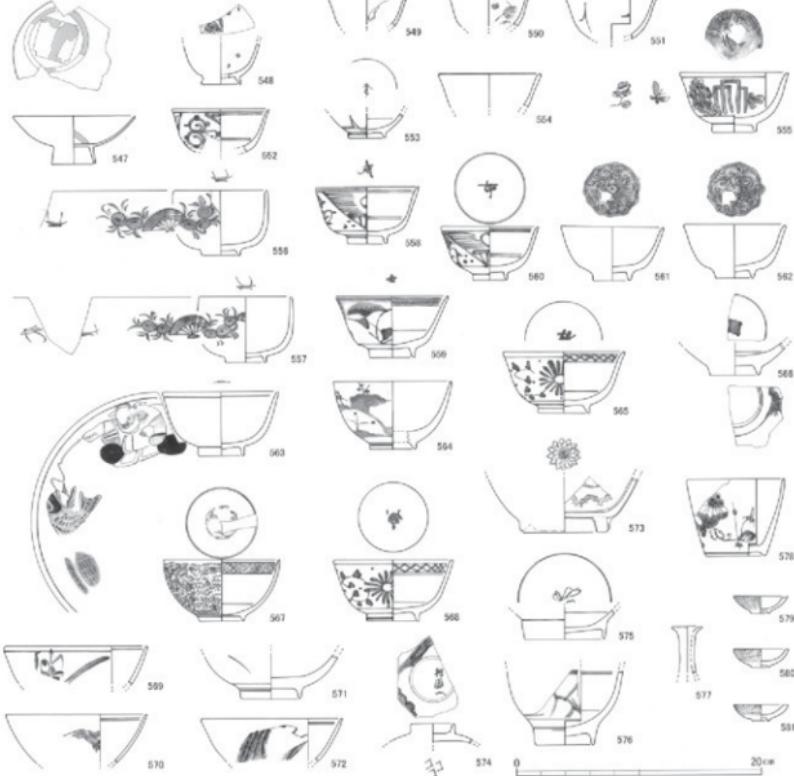
ピット出土遺物 土師器皿(677～679)・培塿(680・681)・土製品(682)・陶器壺(683・684)がある。682は、西行法師をかたどった土製品。683・684は、伊賀信楽のものの中に鉄片を伴う。鉄漿壺であろう。

満 S D 16 出土遺物 土師器皿(685・686)・培塿(687)がある。

区画満 S D 19 出土遺物 円筒埴輪(688・689)・土師器皿(690～695)・培塿(696)・陶器椀(697・699～703)・紅猪口(698)・灯明受皿(704)・行平鍋(706・707)・鉢(705・708)・擂鉢(709)・磁器

紅皿(710)・蕎麦猪口(711)・椀(712～715・717～719)・蓋(716)・鉢(720・721)・水滴(722)がある。688・689は、6世紀中葉のもの。697は、天目茶碗で登窯第4小期である。698は肥前陶器で紅猪口、菊花文が描かれ、18世紀後半のもの。703は、刷毛目茶碗、九州唐津のものであろうか。710～721の磁器は、全て肥前のもの。710は、18世紀後半～19世紀初頭のもの。711は、白磁の蕎麦猪口で18世紀代のもの。712は白磁椀で櫛描網目文が描かれ、口縁部に異なる釉薬が施される。17世紀第2四半期のもの。713は、広東椀、18世紀末～19世紀初頭のもの。714は、外山のもので清朝磁器の影響を受けたもので19世紀前半のもの。716は、外山のもので

SK31

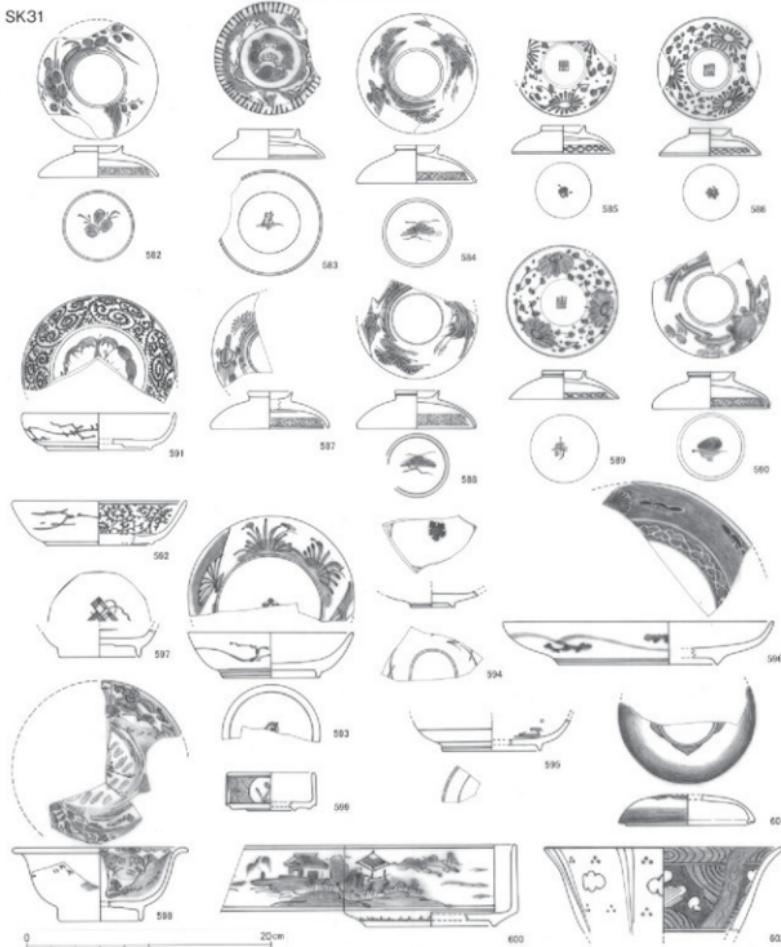


第26図 出土遺物実測図(19)

株か大根が描かれる。18世紀末～19世紀初頭のもの。717は、玉縁状の口縁部で18世紀末～19世紀初頭のもの。718は、竹や網干文が施される。18世紀前半のもの。719は、望料椀の蓋で青磁染付、有田の広瀬窯のもの。18世紀後半～19世紀初頭のもの。720は、蛇の目高台を持ち、竹が描かれる。18世紀後葉のもの。721は、良品な16角形の鉢で風景が描かれる。17世紀中葉のもの。

区画溝 S D 20 出土遺物 穀惠器杯蓋 (723)・円筒埴輪 (724)・土師器皿 (725～729)・陶器灯明皿 (730～734)・皿 (731～733)・灯明受皿 (735～736)・小鉢 (737)・杯椀 (738～748・751)・土鍋 (749)・徳利 (750)・蓋 (752～754)・土瓶 (755)・たばこ盆 (756)・行平鍋 (757～762)・練鉢 (763)・擂鉢 (764・765)・磁器椀 (766～774)・土製品 (775～777)・石硯 (778～779)・鉄製品釘 (780) がある。751は、瀬戸の広東椀、

SK31

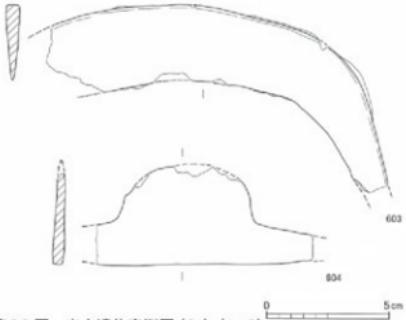


第27図 出土遺物実測図 (20)

登窯 10 小期の 18 世紀末～19 世紀初頭のもの。口縁部を丁寧に研磨して使用している。763 は、瀬戸のもので登窯第 8 小期。770・773 は瀬戸の磁器、他は肥前のもの。770 は、登窯第 10 小期の 19 世紀第 2 四半期のもの。773 は、大正～昭和のもの。766・767 は、外山（波佐見）のもので二重格子文が描かれる。19 世紀中葉のもの。768 は、筒形碗で丸文に雲が描かれる。やや焼成不足のもので、18 世紀後葉～19 世紀初頭のもの。771 は、波佐見のもので雲龍文が描かれる。19 世紀中葉のもの。774 は、有田の内山のもので 17 世紀中葉のもの。775～776 は、土製品で 775 は、魚類を模したものです。777 は、ミニチュアの土瓶。

溝 S D 38 出土遺物 不明土製品（663）がある。
包含層出土遺物 土師器壺（781）・高杯（782・783）・須恵器壺（784）・土師器皿（785～796）・培培（797～805）・ろうそく立（806）・涼炉（807）・七厘（808）・陶器壺（809～824）・皿（825～831）・灯明皿（832～837）・灯明受皿（838～841）・蓋（842～846）・墨書（850）・壺（851）・加工円盤（852）・ミニチュア植木鉢（853）・土製品（854・855）・急須（856）・壺（857）・灰吹（858）・鉢（859）・匙（860）・土瓶蓋（861）・土瓶（862）・香炉（863・864）・甕（865～866・877～881）・火鉢（867）・練鉢（868～872）・擂鉢（873～876）・磁器壺（882～907・910～912）・蓋（908・909）・皿（890・903・913～917）・神酒德利（918）・小瓶（919）・鉢（920～923）・水滴（924）がある。781～784 は、古墳のものであろう。6 世紀中葉のものである。806 は、蠟燭立。

SK31



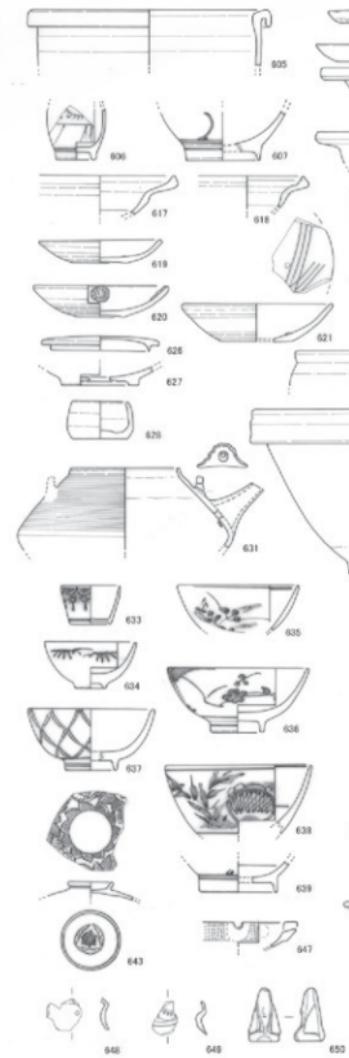
第28図 出土遺物実測図(21)(1:2)

燭立。蠟燭を立てる部分は、銅によって作られる。810 は、美濃の天目茶碗で登窯 4 小期、811 は、瀬戸の天目茶碗で登窯 3 小期のもの。857・859 は、近代のもの。867 は、瀬戸の勇右衛門窯の瓶掛で登窯 9・10 小期の 19 世紀前半のもの。884・885・889・892・896・904・909・915・923 は、瀬戸の磁器、他は、肥前のものである。884 は、19 世紀中葉～後葉のもの。892・904 は、登窯 10 小期のものである。904 は花唐草文が描かれる。885・889・896・909・915・923 は、明治～昭和のものである。882 は、18 世紀後半～19 世紀初頭のもの。883 は、波佐見のもので 19 世紀中葉のもの。886・898・900・905・910～912 は、広東碗で 18 世紀末～19 世紀初頭のもの。898 は、小型で 18 世紀第 3 四半期のもの。900 は、葉文が描かれる。905 は、粗製である。911 は、内面に「寿」が描かれる。912 は、つる草の文様が描かれる。891・893・906 は、くらわんか碗で全て 18 世紀後半のもの。887 は、波佐見のもので斜格子文が描かれる。18 世紀後葉のもの。888 は、松文が描かれ、18 世紀前葉のもの。890 は、底部のみ、皿の可能性が高い。895 は、筒形碗で雪輪文が描かれる。18 世紀末～19 世紀初頭のもの。897 は、波佐見のもので梅花文が描かれる。18 世紀中葉～後葉のもの。899 は、粗製の丸碗で 18 世紀中葉～後葉のもの。901 は、粗製碗でつる草が描かれ、18 世紀後葉のもの。902・907 は望月碗で、902 は、松葉文が描かれ、902・907 共に 18 世紀後葉～19 世紀初頭のもの。903 は、波佐見のもので碗としたが皿の可能性もある。18 世紀後半のもの。908 は、広東碗の蓋で波濤文が描かれ、18 世紀末～19 世紀初頭のもの。913 は、波佐見のもので竹籠文が描かれる。18 世紀後半～19 世紀初頭のもの。914 は、紅葉と松葉文が描かれ、18 世紀前半のもの。916 は、蛸唐草文と松竹梅文が描かれ、18 世紀末～19 世紀初頭のもの。917 は、志田窯のもので明治期。918 は、波佐見のもので 19 世紀前半～中葉のもの。921 は、青磁染付で 18 世紀後半のもの。922 は、美濃のどんぶり鉢とみられる。明治～大正のもの。924 は、菊の文様で 18 ～ 19 世紀のもの。

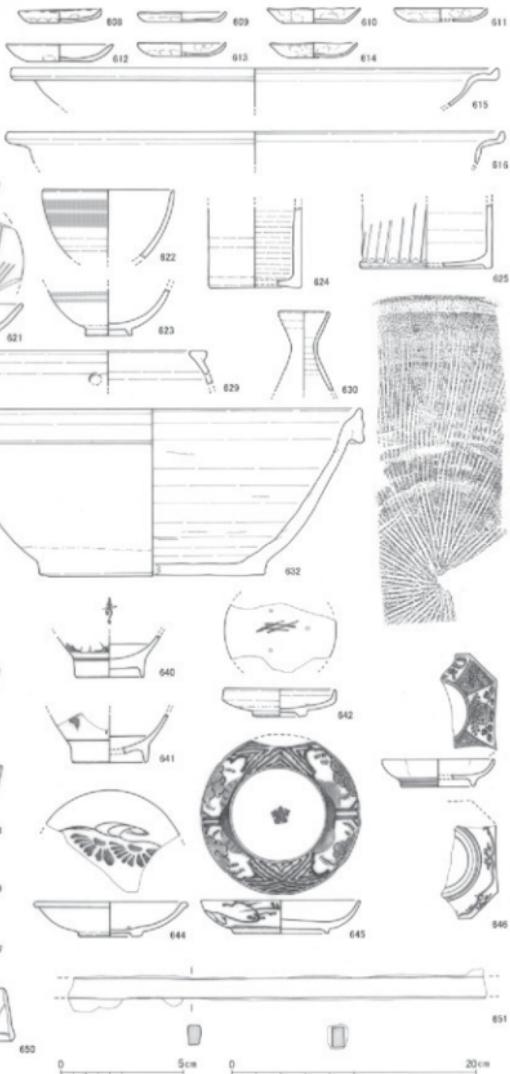
[参考文献]

- ・新宿区内藤町道路調査会「内藤町道路」(1992 年)
- ・江戸道路研究会「国説江戸考古学研究事典」(柏書房 2001 年)
- ・川西宏幸「円筒埴輪総論」「古墳時代政治史序説」(1988 年)

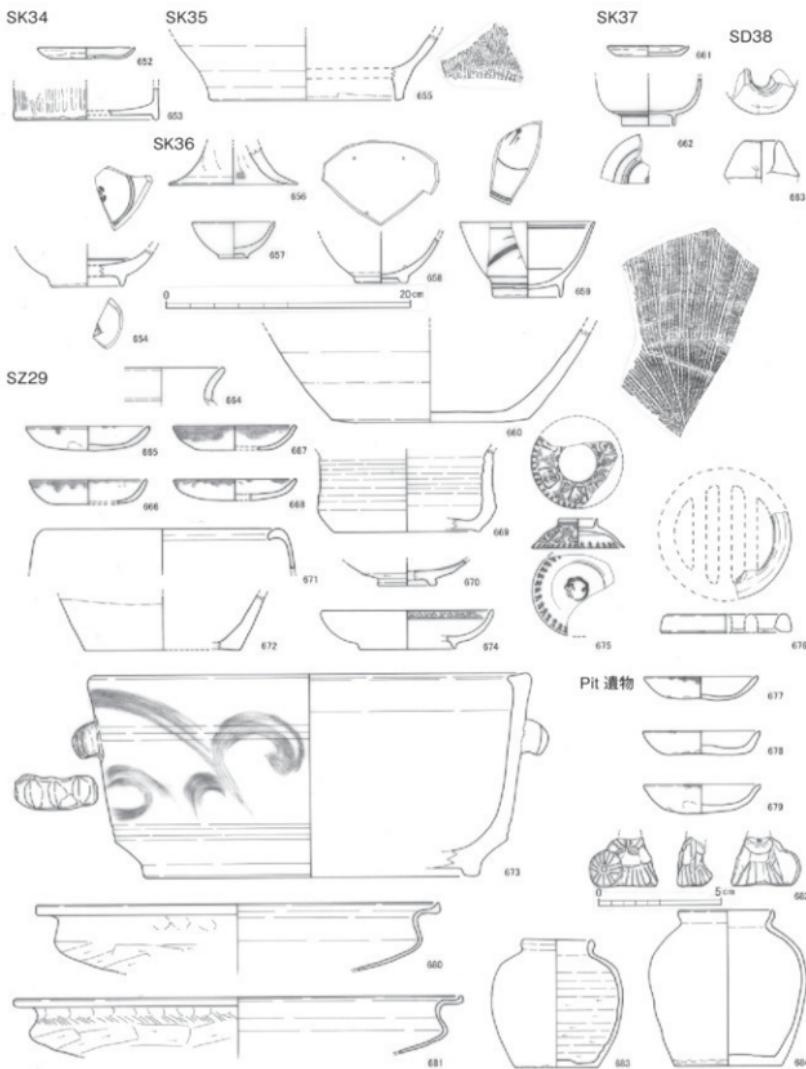
SK32



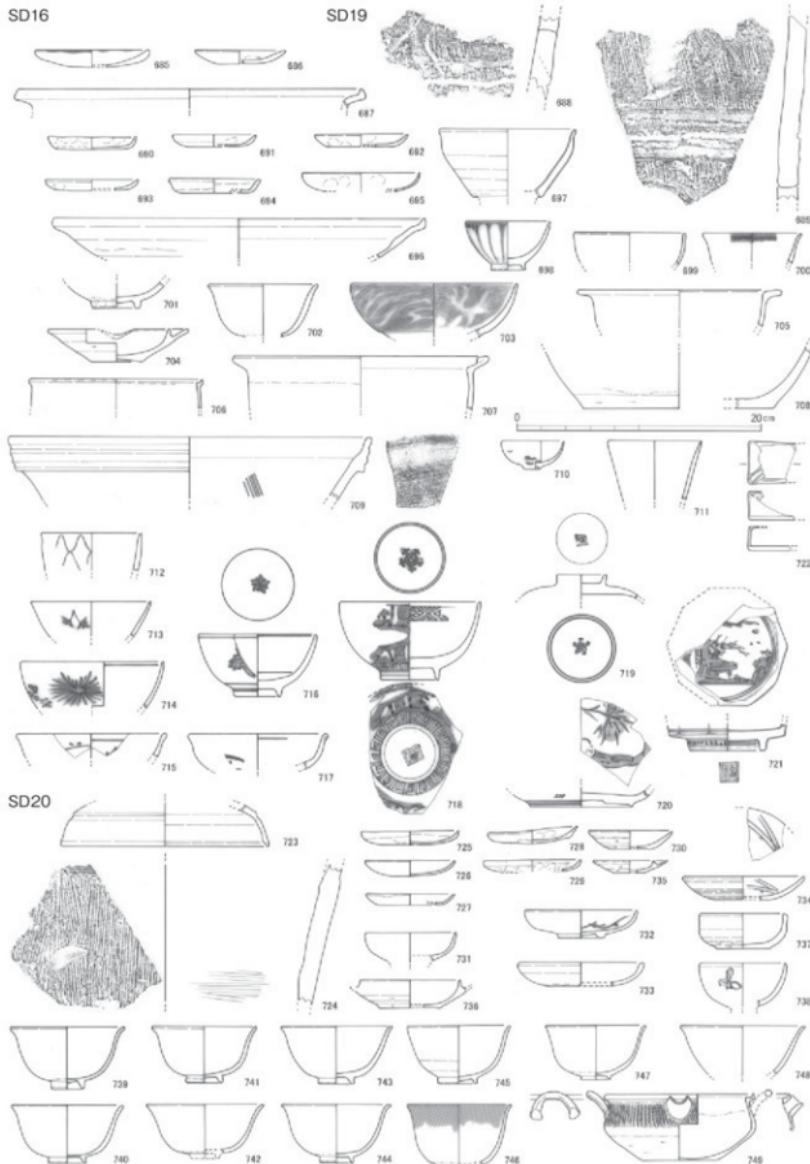
SK33



第29図 出土遺物実測図(22) (650・651は1:2)



第30図 出土遺物実測図(23) (682は1:2)



第31図 出土遺物実物図(24)

・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 実業 中世・近世編 戸系』(愛知県 2007年)

・畠中英二『純信楽焼の考古学的研究』(サンライズ出版 2007年)

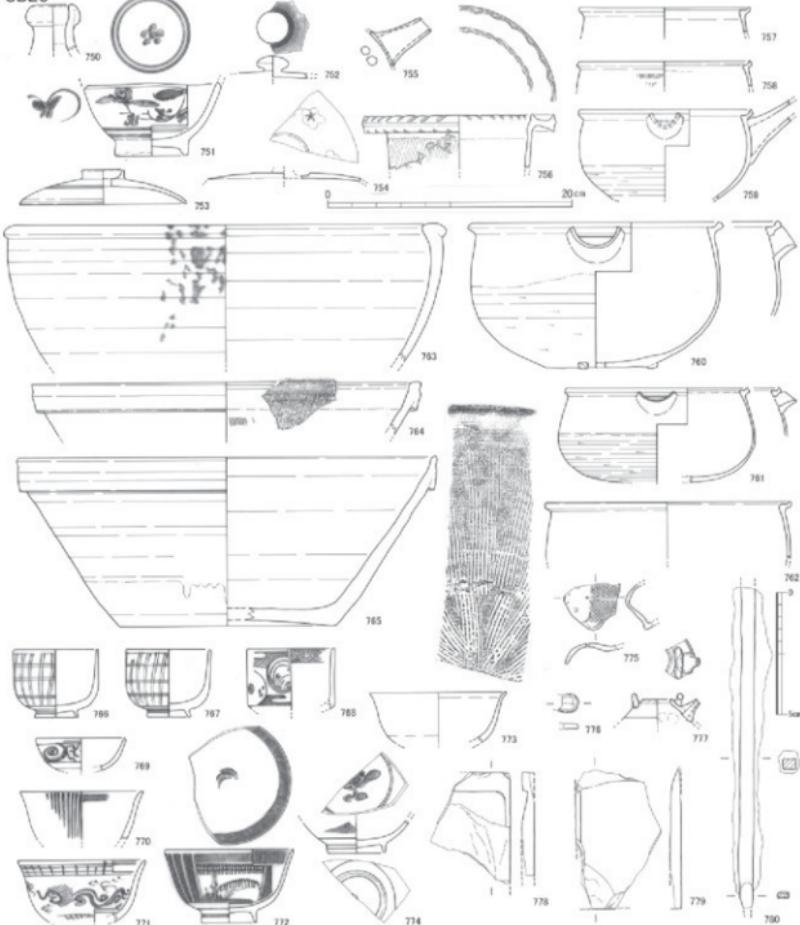
・堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の総合的考察」[江戸出土陶磁器・土器の諸問題II] (江戸陶磁土器研究グループ 1966年)

・大橋康二「肥前陶磁」(ニューサイエンス社 1988年)

・藤澤良祐「瀬戸窯跡群」(同成社 2005年)

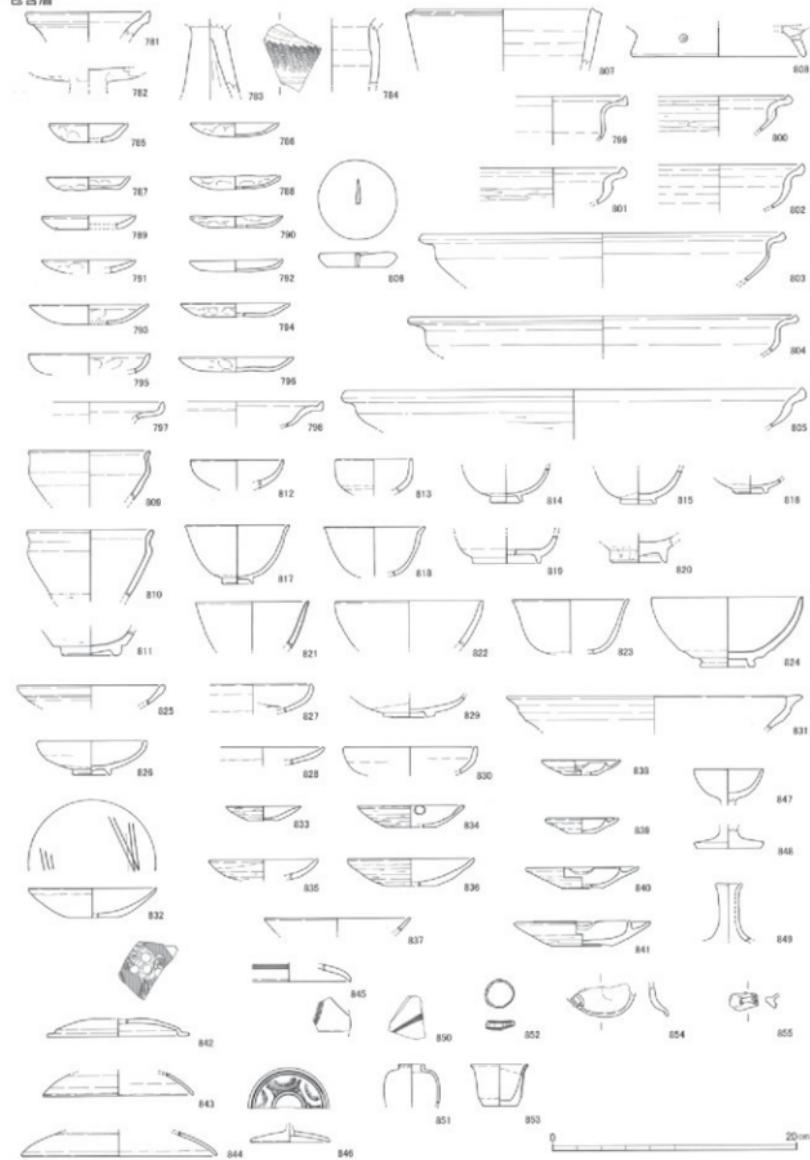
・畠中英二『信楽焼の考古学的研究』(サンライズ出版 2003年)

SD20



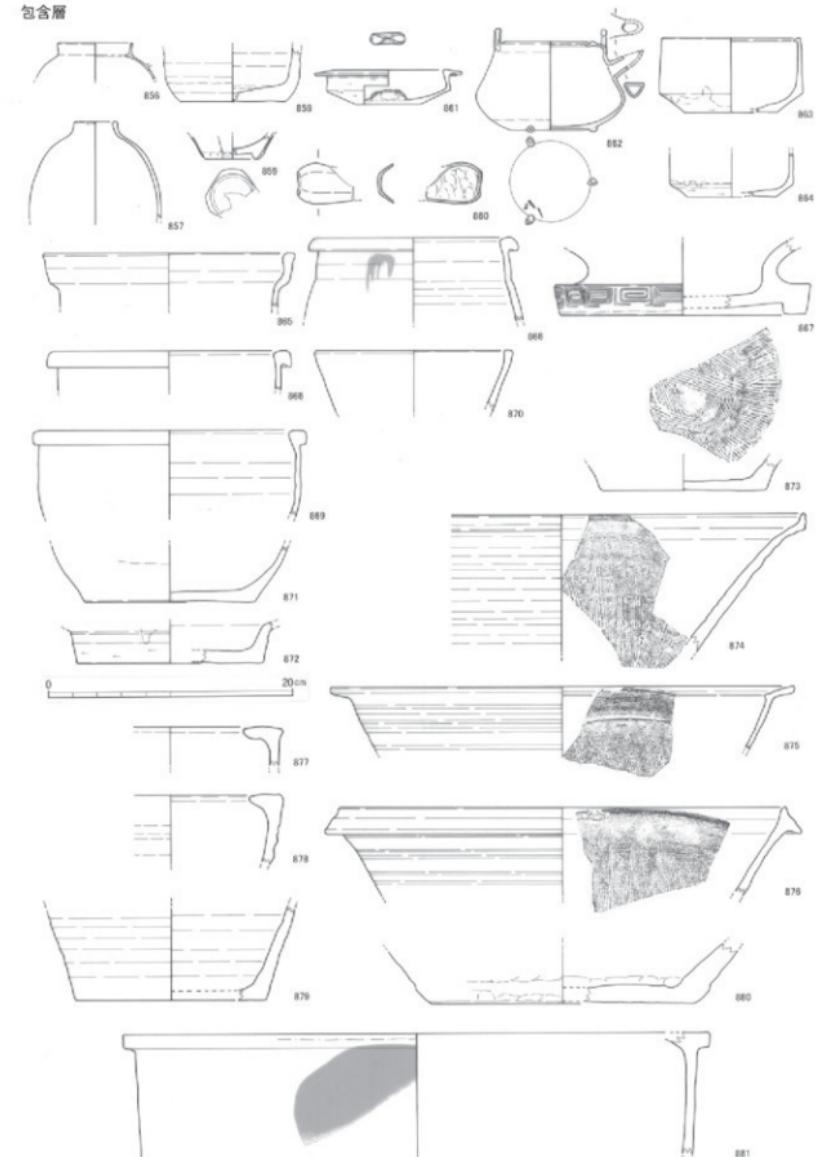
第32図 出土遺物実測図(25) (780は1:2)

包含層



第33図 出土遺物実測図(26)

包含層



第34図 出土遺物実測図(27)

包含層



第35図 出土遺物実測図 (28)

第V章　まとめ

1 古墳時代について

(1) 古墳について

今回の調査において大きな意義は、上野市市街地で円墳3基を確認したことである。それぞれの規模は、1号墳が直径15m（埴丘基底部からの計測値）、2号墳は、直径13m、3号墳は、直径6mである。上野市市街地の台地上において古墳そのものの存在は、昭和35年に発掘調査のメスが入った伊予ノ丸古墳群が知られている。調査では、円筒埴輪列・鉄劍・鏡が出土しており、古墳が存在したと推測される。

そして、今回の調査地から西方約700mの伊予ノ丸古墳群に至るまでの範囲は、古墳が造営されていたと考えられる。また、それを裏付けるように上野城下町遺跡（第1～4次）^①の発掘調査において円筒埴輪片が出土している点からも妥当な想定であろう。おそらく現在の市街地の台地には、5世紀後半から6世紀半ばにかけての群集墳が形成されていたと考えられる。

(2) 2重状の周溝について

今回、調査した1号墳及び2号墳の周溝の内側にもう一重周溝が巡らされていたことを確認した。しかしながら内側の周溝からは、土師器・須恵器などの古墳に伴うような遺物の出土ではなく、同時期もしくは、外側の周溝削削以前に削削されていることが判断できる。従って古墳の周溝が埋没してからも古墳の埴丘を墳墓として認識し、ある時期に再度削削された可能性は、ないと考えられる。このような周溝の類例としては、松阪市（旧鷺野町鳥田）所在の天保古墳群1号墳^②がある。この古墳の周溝と同様に埴丘を築くさいに何らかの役割を果たしたか、造営における何らかの基準を示している可能性もある。

う。

2 江戸時代について

(1) 出土遺物について

今回出土した遺物は、非常に数多くバラエティーに富んでいる。その内容は、陶器をはじめとして土器・土製品・石製品・錢貨・鉄製品に及ぶものである。

最初に陶器についてみておきたい。陶器は、伊賀信楽産の製品がほとんどである。一部において瀬戸・備前・万古の製品が含まれている。陶器は、遺跡の立地性を鑑みると内陸部であることと陶器の窯業生産地に近いことから伊賀信楽産の製品が多くを占める理由であろう。

また、陶器の急須（報告書番号以下略）(497)・土瓶（516）には、ひらがなで「いか」の刻印が底部に押されているものが含まれており、今後伊賀焼についての良好な研究資料である。

さらに、磁器は、肥前の製品が圧倒的多数を占める。しかし、貿易陶磁器（福建省産）のものが1点（551）含まれている。上野城下町遺跡のこの地点から出土したことに大きな意義があろう。

最後に、磁器は焼垂痕跡を留めるものが多い。それらは、磁器の中でも良品のものが主体であり、磁器を大切に扱ってきた証である一方、磁器の流通が大きく影響していたと思われる。

(2) 屋敷地について

今回は、調査区内において建物を検出することは、できなかった。しかしながら、溝2条（S D 19・20）を確認することができた。これらは、南北方向に平行して掘削されていた。つまり城下町の屋敷地を細かく区画していた溝と考えられ、長細い区画がなされていたと思われる。

また、屋敷地の主は、遺物の時期が18世紀後半以前であること、調査地が城下町の絵図面から「農人（農民）」と記載されていることが判明している。しかしながら、遺物の多彩さからすると「農人」という身分が藤堂藩においてどのような立場であるのかを含めて今後の課題としたい。

【註】

① 三重県埋蔵文化財センター「上野城下町遺跡発掘調査報告

－東ノ堅町筋（第1～4次）－」（三重県埋蔵文化財報告273
2006年）

② 三重県埋蔵文化財センター「天保古墳群」近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財調査報告 第3分冊『三重県埋蔵文化財調査報告87-9 1991年』

写 真 図 版



調査前風景（南から）



調査前風景（南西から）

図版 2



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）



1号墳全景（北東から）



2・3号墳全景（南東から）

図版4



SK11 遺物出土状況（東から）



B 地区調査区全景（南西から）

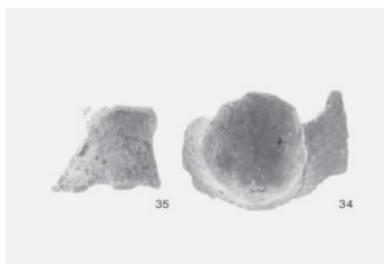
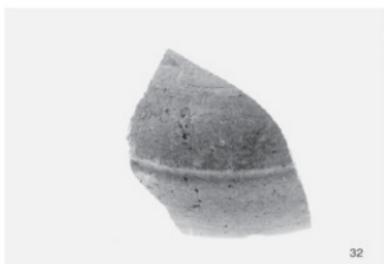
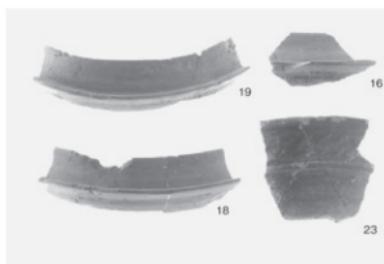
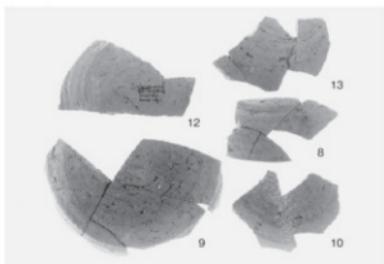
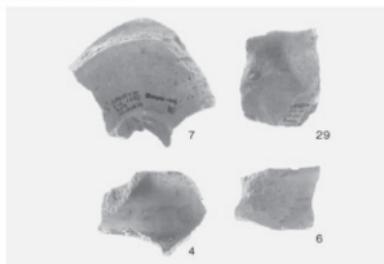


工事立会調査区全景（北から）



工事立会調査区全景（南から）

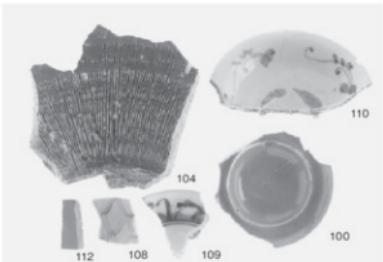
図版6 出土遺物



図版 7 出土遺物



63



110

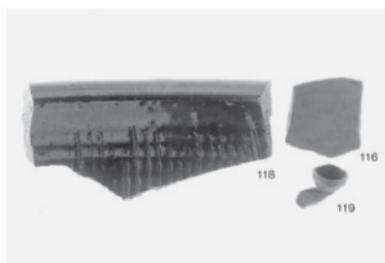
104

112

108

109

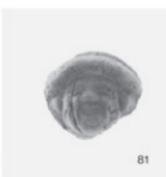
100



118

116

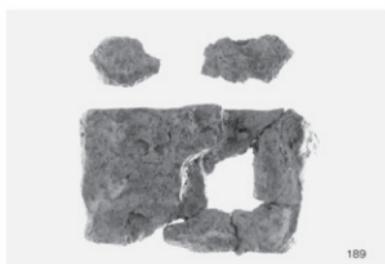
119



81



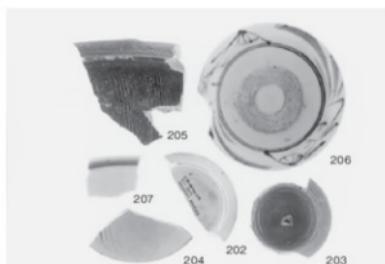
208



189



121



205

206

207

204

202

203



214

图版 8 出土遗物



220



221



224



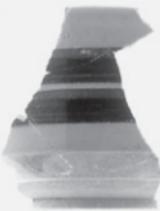
227



234



247



248



255

図版 9 出土遺物



圖版 10 出土遺物



図版 11 出土遺物



377



379



397



409



412



418



436



446

圖版 12 出土遺物



358



359



467



450



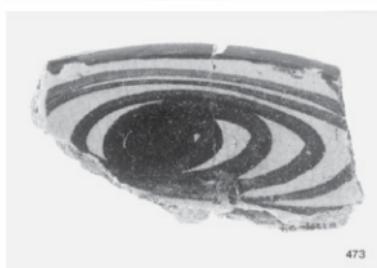
465



466



468



473



475

図版 13 出土遺物



図版 14 出土遺物



505



511



516



517



523



525



531



530



513



533

図版 15 出土遺物



536



537



538



555



557



558



560



562



563

図版 16 出土遺物



567



568



578



580



582



586



589

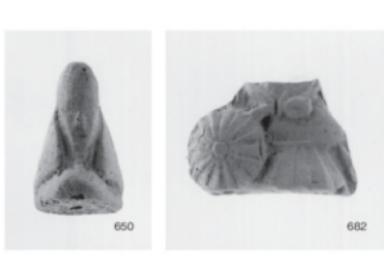
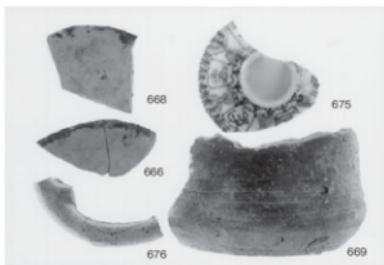


583

図版 17 出土遺物



図版 18 出土遺物



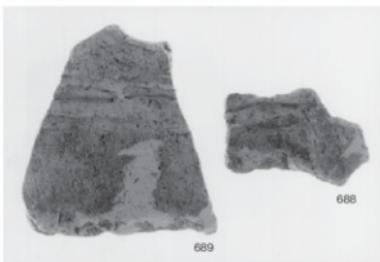
図版 19 出土遺物



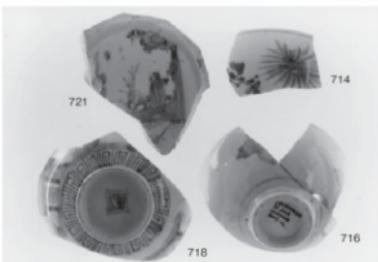
683



684



688

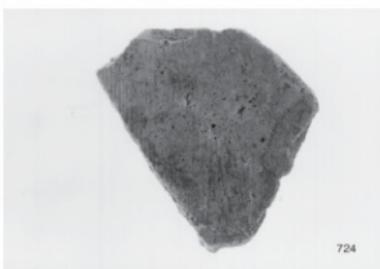


721

714

718

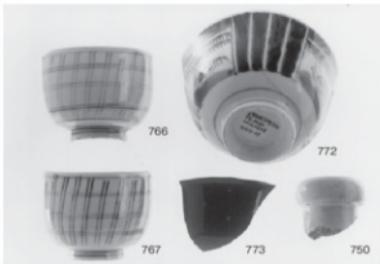
716



724



749



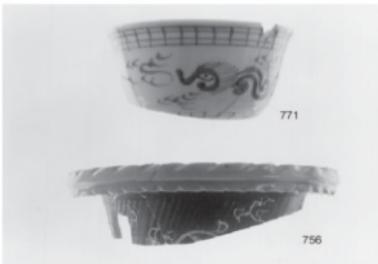
766

772

767

773

750



771

756

圖版 20 出土遺物



778



806



846



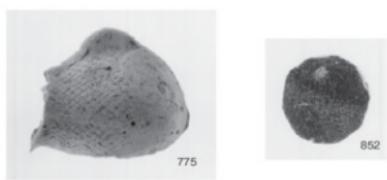
853



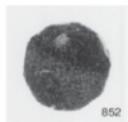
867



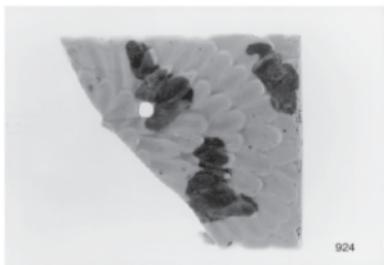
895



775



852



924

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告 352

上野城下町遺跡（第5次）発掘調査報告

～伊賀市上野農人町所在～

2014年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 (有)ミフジ印刷
